

令和5(2023)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

鳥取城下町遺跡(第15次調査)
鳥取城跡(第54次調査)
宮長竹ヶ鼻遺跡
上野山5号墳
秋里遺跡
布勢鶴指奥墳墓群
良田平田遺跡
栗谷所在遺跡
山宮阿弥陀森遺跡
大楠遺跡
湖山第1遺跡
身干山遺跡
鳥取城下町遺跡(第16次調査)
鳥取城跡(第60次調査)

2024

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業計画に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて実施した市内遺跡の発掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発事業と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

本書をまとめるにあたり関係機関をはじめ、地元関係者の方々には多大なるご助言・ご協力をいただきました。ここに深く感謝を申し上げます。

本報告書が私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

令和6年3月

鳥取市教育委員会
教育長 尾室 高志

例 言

1. 本書は令和2年度(2020)～令和5年度(2023)に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2. 本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
3. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会が保管している。

本文目次

序		第5節 秋里遺跡	18
例言		第6節 布勢鶴指奥墳墓群	21
第1章 発掘調査の経緯と経過		第7節 良田平田遺跡	22
第1節 調査に至る経緯と経過	1	第8節 栗谷所在遺跡	23
第2節 調査体制	2	第9節 山宮阿弥陀森遺跡	29
第2章 調査の結果	5	第10節 大桸遺跡	30
第1節 鳥取城下町遺跡(第15次調査)	5	第11節 湖山第1遺跡	32
第2節 鳥取城跡附太閤ヶ平(第54次調査)	6	第12節 身干山遺跡	34
第3節 宮長竹ヶ鼻遺跡	8	第13節 鳥取城下町遺跡(第16次調査)	35
第4節 上野山5号墳	16	第14節 鳥取城跡附太閤ヶ平(第60次調査)	38

挿図目次

第1図 調査遺跡位置図	3	第13図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第11トレンチ実測図	13
第2図 鳥取城下町遺跡(第15次調査) 調査トレンチ位置図	5	第14図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第12トレンチ実測図	14
第3図 鳥取城下町遺跡(第15次調査) 第1・2・3トレンチ実測図	5	第15図 宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物実測図	15
第4図 鳥取城跡(第54次調査) 調査トレンチ位置図	6	第16図 上野山5号墳 調査トレンチ位置図	17
第5図 鳥取城跡(第54次調査) トレンチ実測図	7	第17図 上野山5号墳 第1トレンチ実測図	17
第6図 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査トレンチ位置図	8	第18図 上野山5号墳 第2トレンチ実測図	17
第7図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ実測図	9	第19図 秋里遺跡 調査トレンチ位置図	18
第8図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ第1遺構面実測図	9	第20図 秋里遺跡 第1トレンチ実測図	19
第9図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ第2遺構面実測図	10	第21図 秋里遺跡 出土遺物実測図	20
第10図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第9トレンチおよびSK01実測図	11	第22図 布勢鶴指奥墳墓群 調査トレンチ位置図	21
第11図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ実測図	11	第23図 布勢鶴指奥墳墓群 第1トレンチ実測図	21
第12図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ第1・2遺構面およびP01～P03・SK02・SK03実測図	12	第24図 良田平田遺跡 調査トレンチ位置図	22
		第25図 良田平田遺跡 第1トレンチ実測図	22
		第26図 栗谷所在遺跡 調査トレンチ位置図	23
		第27図 栗谷所在遺跡 第1トレンチ実測図	24
		第28図 栗谷所在遺跡 第2トレンチ実測図	24
		第29図 栗谷所在遺跡 第3トレンチ実測図	26
		第30図 栗谷所在遺跡 第4トレンチ実測図	26
		第31図 栗谷所在遺跡 第5トレンチ実測図	26
		第32図 栗谷所在遺跡 第7トレンチ実測図	27

第33図	栗谷所在遺跡 第8トレンチ実測図	27	第42図	湖山第1遺跡 第1トレンチ実測図	33
第34図	栗谷所在遺跡 出土遺物実測図	28	第43図	身干山遺跡 調査トレンチ位置図	34
第35図	山宮阿弥陀森遺跡 調査トレンチ位置図	29	第44図	身干山遺跡 第1トレンチ実測図	34
第36図	山宮阿弥陀森遺跡 第1トレンチ実測図	29	第45図	鳥取城下町遺跡(第16次調査) 調査トレンチ位置図	35
第37図	大柵遺跡 調査トレンチ位置図	30	第46図	鳥取城下町遺跡(第16次調査) 第1トレンチ実測図	37
第38図	大柵遺跡 第1トレンチ実測図	31	第47図	鳥取城下町遺跡(第16次調査) 出土遺物実測図	37
第39図	大柵遺跡 第2トレンチ実測図	31	第48図	鳥取城跡(第60次調査) 調査トレンチ位置図	38
第40図	大柵遺跡 出土遺物実測図	31			
第41図	湖山第1遺跡 調査トレンチ位置図	32			

写 真 目 次

写真1	鳥取城跡(第60次) 第1トレンチ深堀 (南から)	40	写真9	鳥取城跡(第60次) 第4トレンチ調査後 (北から)	41
写真2	鳥取城跡(第60次) 第1トレンチ調査後 (東から)	40	写真10	鳥取城跡(第60次) 第5トレンチ調査後 (南から)	41
写真3	鳥取城跡(第60次) 第2トレンチ杭検出 近景(北から)	40	写真11	鳥取城跡(第60次) 第5トレンチ調査後 (北から)	41
写真4	鳥取城跡(第60次) 第2トレンチ調査後 (西から)	40	写真12	鳥取城跡(第60次) 第6トレンチ調査後 (南から)	41
写真5	鳥取城跡(第60次) 第2トレンチ調査後 (東から)	40	写真13	鳥取城跡(第60次) 第6トレンチ調査後 (北から)	41
写真6	鳥取城跡(第60次) 第3トレンチ断面深 堀(東から)	40	写真14	鳥取城跡(第60次) 第7トレンチ深堀 (北から)	41
写真7	鳥取城跡(第60次) 第3トレンチ調査後 (北から)	40	写真15	鳥取城跡(第60次) 第7トレンチ調査後 (北から)	41
写真8	鳥取城跡(第60次) 第4トレンチ調査後 (南から)	40	写真16	鳥取城跡(第60次) 第8トレンチ調査後 (西から)	41

表 目 次

表1	試掘調査一覧	1
----	--------	---

図 版 目 次

図版 1

- 鳥取城下町遺跡(第15次) 第3トレンチ完掘
(西から)
鳥取城跡(第54次) 埋設管検出状況(北東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチSK01検出
(南から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチSD01・SK02完掘
(南から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ調査地断面
(南西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ調査後(東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第9トレンチ完掘(南東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第9トレンチ北壁断面(南から)

図版 2

- 宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ調査後(南から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ調査地断面
(南西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチSE01検出(西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチSK01検出(西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第11トレンチ調査後(東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第11トレンチ調査地断面
(東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第12トレンチ調査後(東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡 第12トレンチ断面(南から)

図版 3

- 上野山5号墳 第1トレンチ調査後(南から)
上野山5号墳 第1トレンチ調査地断面
(南東から)
上野山5号墳 第2トレンチ調査後(南から)
上野山5号墳 第2トレンチ調査地断面
(南西から)
秋里遺跡 第1トレンチ調査前(北西から)
秋里遺跡 第1トレンチ最終深掘(南西から)
秋里遺跡 第1トレンチ最終深掘北壁面
(南西から)
秋里遺跡 第1トレンチ第14層上面ピット完掘
(南西から)

図版 4

- 布勢鶴指奥遺跡 第1トレンチ調査前(西から)
布勢鶴指奥遺跡 第1トレンチ調査後(西から)
良田平田遺跡 第1トレンチ断面(東から)
良田平田遺跡 第1トレンチ調査後(南から)
栗谷所在遺跡 第1トレンチベルト設定状況
(南から)
栗谷所在遺跡 第1トレンチ調査後(南から)
栗谷所在遺跡 第2トレンチ断面(南から)
栗谷所在遺跡 第2トレンチ調査後(南東から)

図版 5

- 栗谷所在遺跡 第3トレンチ断面(南から)
栗谷所在遺跡 第3トレンチ調査後(東から)
栗谷所在遺跡 第4トレンチ断面(東から)
栗谷所在遺跡 第4トレンチ調査後(北東から)
栗谷所在遺跡 第5トレンチ調査後(北から)
栗谷所在遺跡 第5トレンチ断面(東から)
栗谷所在遺跡 第6トレンチ調査後(西から)
栗谷所在遺跡 第6トレンチ調査後(東から)

図版 6

- 栗谷所在遺跡 第7トレンチ設定状況(西から)
栗谷所在遺跡 第7トレンチ調査後(南から)
栗谷所在遺跡 第8トレンチ断面(南から)
栗谷所在遺跡 第8トレンチ調査後(南から)
山宮阿弥陀森遺跡 第1トレンチ調査後(北から)
山宮阿弥陀森遺跡 第1トレンチ北断面
(南東から)
大柵遺跡 第1トレンチ断面(南西から)
大柵遺跡 第1トレンチ調査後(南東から)

図版 7

- 大柵遺跡 第2トレンチ断面(西から)
大柵遺跡 第2トレンチ調査後(南西から)
湖山第1遺跡 第1トレンチP01平面(北から)
湖山第1遺跡 第1トレンチ西断面(北西から)
湖山第1遺跡 第1トレンチ調査後(南から)
湖山第1遺跡 第1トレンチ南断面(北から)
身干山遺跡 第1トレンチ断面(南東から)
身干山遺跡 第1トレンチ調査後(南から)

図版 8

鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチ調査後
(北東から)
鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチ断面
(北から)
鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチ断面
(北東から)
鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチSK01検
出(南東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡(第8トレンチ) 出土遺物 1
宮長竹ヶ鼻遺跡(第8トレンチ) 出土遺物 2
宮長竹ヶ鼻遺跡(第9トレンチ) 出土遺物 1
宮長竹ヶ鼻遺跡(第9トレンチ) 出土遺物 2

図版 9

宮長竹ヶ鼻遺跡(第9トレンチ) 出土遺物 3
宮長竹ヶ鼻遺跡(第10トレンチ) 出土遺物
宮長竹ヶ鼻遺跡(第11トレンチ) 出土遺物
宮長竹ヶ鼻遺跡(第12トレンチ) 出土遺物
秋里遺跡 出土遺物 1
秋里遺跡 出土遺物 2
秋里遺跡 出土遺物 3
秋里遺跡 出土遺物 4

図版10

秋里遺跡 出土遺物 5
栗谷所在遺跡(第1トレンチ) 出土遺物
栗谷所在遺跡(第2トレンチ) 出土遺物
栗谷所在遺跡(第4トレンチ) 出土遺物
栗谷所在遺跡(第7トレンチ) 出土遺物 1
栗谷所在遺跡(第7トレンチ) 出土遺物 2
大桝遺跡(第2トレンチ) 出土遺物
鳥取城下町遺跡(第16次) 出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

鳥取市は面積765.3km²、人口約18万人を擁する山陰地方最大級の都市であり、古墳、集落跡、散布地等の埋蔵文化財包蔵地は5,000か所以上所在している。また近年では各種開発事業に伴い、遺跡の数は増加の一途をたどっている。このような中、近年では大型公共事業は減少傾向にあるものの、民間事業者による開発事業計画は増加しており開発事業との調整を図る試掘調査の件数も増加している。

今回報告する試掘調査は令和2(2020)年度から令和5(2023)年度に実施したものである。令和2年度に実施した鳥取城下町遺跡(第15次調査)は建設工事に先立ち遺構の有無を、令和3年度に実施した鳥取城跡(第54次調査)は、不通となった送水管の管路と破損位置の確認、宮長竹ヶ鼻遺跡は宅地造成事業に先立つ遺構の遺存状況の確認が目的である。令和4年度に実施した上野山5号墳は太陽光発電施設建設に伴い古墳の遺存状況確認、秋里遺跡は開発事業、布勢鶴指奥墳墓群および良田平田遺跡は携帯電話無線基地局建設、山宮阿弥陀森遺跡は個人住宅建設、大柵遺跡は擁壁設置、湖山第1遺跡は開発計画、身干山遺跡は道路建設、鳥取城下町遺跡(第16次調査)は開発計画に伴う遺跡の遺存状況確認を目的とし、鳥取城跡(第60次調査)は重要文化財仁風閣の耐震改修工事に先立ち、周囲の近世遺構面の遺存状況や深度の確認を目的とした調査である。令和4年と5年の2ヶ年にわたり実施した栗谷所在遺跡の調査は、興禅寺庭園の整備に先立ち近世遺構面の状況確認を目的としたものである。

表1 試掘調査一覧

節	遺跡名	トレンチ数	調査面積(m ²)	調査期間
1	鳥取城下町遺跡(第15次調査)	3	3	令和2(2020)年10月27・28日
2	鳥取城跡(第54次調査)	2	20.6	令和3(2021)年5月25日～6月16日
3	宮長竹ヶ鼻遺跡	5	112	令和4(2022)年2月14日～4月5日
4	上野山5号墳	2	14	令和4(2022)年4月19～21日
5	秋里遺跡	1	26	令和4(2022)年8月1～23日
6	布勢鶴指奥墳墓群	1	20.25	令和4(2022)年9月9日
7	良田平田遺跡	1	20.25	令和4(2022)年9月7～12日
8	栗谷所在遺跡	8	53.39	令和4(2022)年9月25日～10月20日 令和5(2023)年6月5～19日
9	山宮阿弥陀森遺跡	1	9	令和5(2023)年1月17・18日
10	大柵遺跡	2	8.85	令和5(2023)年2月1～3日
11	湖山第1遺跡	1	10	令和5(2023)年2月9～22日
12	身干山遺跡	1	10	令和5(2023)年2月27日～3月1日
13	鳥取城下町遺跡(第16次調査)	1	10	令和5(2023)年3月6～16日
14	鳥取城跡(第60次調査)	8	43.5	令和5(2023)年3月17～24日

第2節 調査体制

発掘調査及び報告書作成時の組織体制等は以下の通りである。

1. 試掘調査

令和2(2020)年度

教育長 尾室高志

文化財課

課長：佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係

主任兼文化財専門員：細田隆博

技師：岡垣頼和

会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係

係長兼文化財専門員：加川崇

主任兼文化財専門員：坂田邦彦

主事：寺西和代・田野詩織

会計年度任用職員：田中瞳(1月～)

鳥取市埋蔵文化財センター 所長：山田真宏

調査員：谷口恭子・横山聖

令和3(2021)年度

教育長 尾室高志

文化財課

課長：佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係

主任兼文化財専門員：細田隆博

技師：岡垣頼和

会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係

係長兼文化財専門員：加川崇

主任兼文化財専門員：坂田邦彦

主事：寺西和代・田野詩織

会計年度任用職員：田中瞳

鳥取市埋蔵文化財センター 所長：野際章人

副所長：谷口恭子

調査員：横山聖

令和4(2022)年度

教育長 尾室高志

文化財課

課長：佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係

主任兼文化財専門員：細田隆博

技師：岡垣頼和

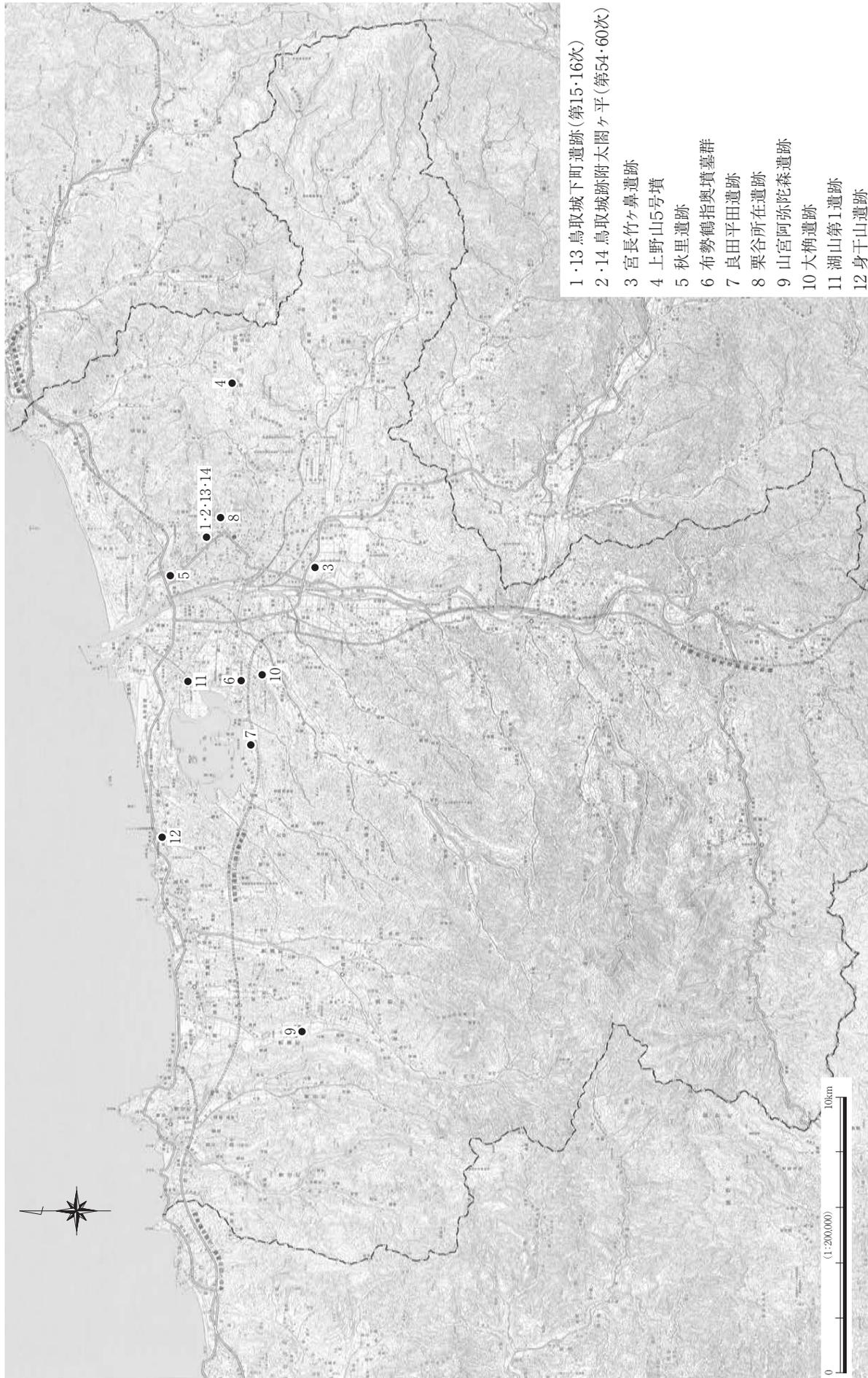
会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係

係長兼文化財専門員：加川崇

主任兼文化財専門員：坂田邦彦

主事：寺西和代・椿保奈瀬



第1図 調査遺跡位置図

鳥取市埋蔵文化財センター 所長：野際章人
副所長：谷口恭子
調査員：横山聖

2. 試掘調査および報告書作成

令和5(2023)年度

教育長 尾室高志

文化財課

課長：佐々木敏彦

課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係

主幹兼文化財専門員：細田隆博

技師：岡垣頼和

会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係

係長兼文化財専門員：加川崇

主任兼文化財専門員：坂田邦彦

主事：寺西和代・椿保奈瀬

鳥取市埋蔵文化財センター 所長：野際章人(～5月)、浅井俊彦(6月～)

副所長：谷口恭子

調査員：神谷伊鈴・横山聖

第2章 調査の結果

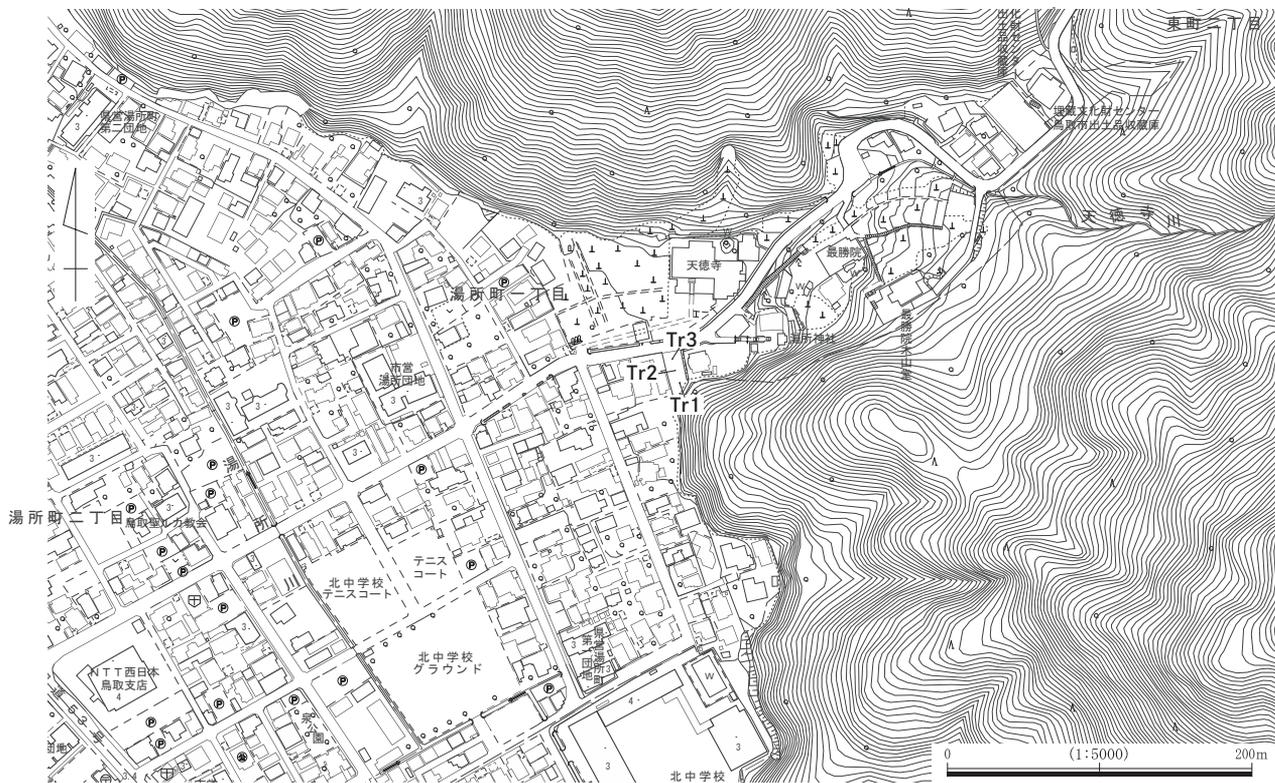
第1節 鳥取城下町遺跡(第15次調査)

調査期間 令和2(2020)年10月27・28日

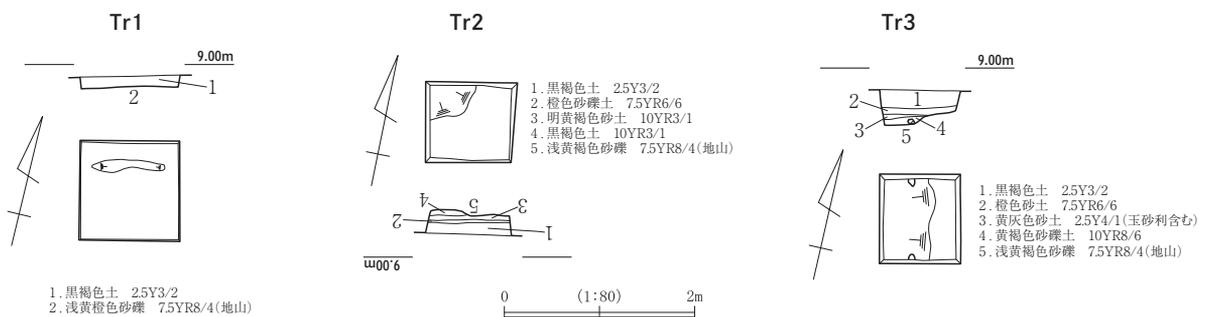
今回の調査は、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平指定範囲西側隣接地で実施した。近世当時もまた城域の辺縁部にあたり、周辺は山奉行の敷地が存在していたことから、今回の開発計画に先立ち、遺構の有無を確認する目的で3ヶ所にトレンチを設定した。

第1～3トレンチ(Tr1～3)〔第3図、図版1〕

並列するように1m四方のトレンチを3ヶ所に設定した。調査の結果、いずれのトレンチでも遺構・遺物は確認できなかった。各トレンチ、現地表下は現代の造成土がみられ、これらを除去すると、花崗岩質の固い岩盤面が広がる。山の傾斜に併せ岩盤もまた傾斜しており、第1トレンチで地表下20cm、標高8.7mであったが、西側の第3トレンチでは地表下40cm、標高8.4mと30cm程低くなる。



第2図 鳥取城下町遺跡(第15次調査) 調査トレンチ位置図



第3図 鳥取城下町遺跡(第15次調査) 第1・2・3トレンチ実測図

第2節 鳥取城跡附太閤ヶ平(第54次調査)

調査期間 令和3(2021)年5月25日～6月16日

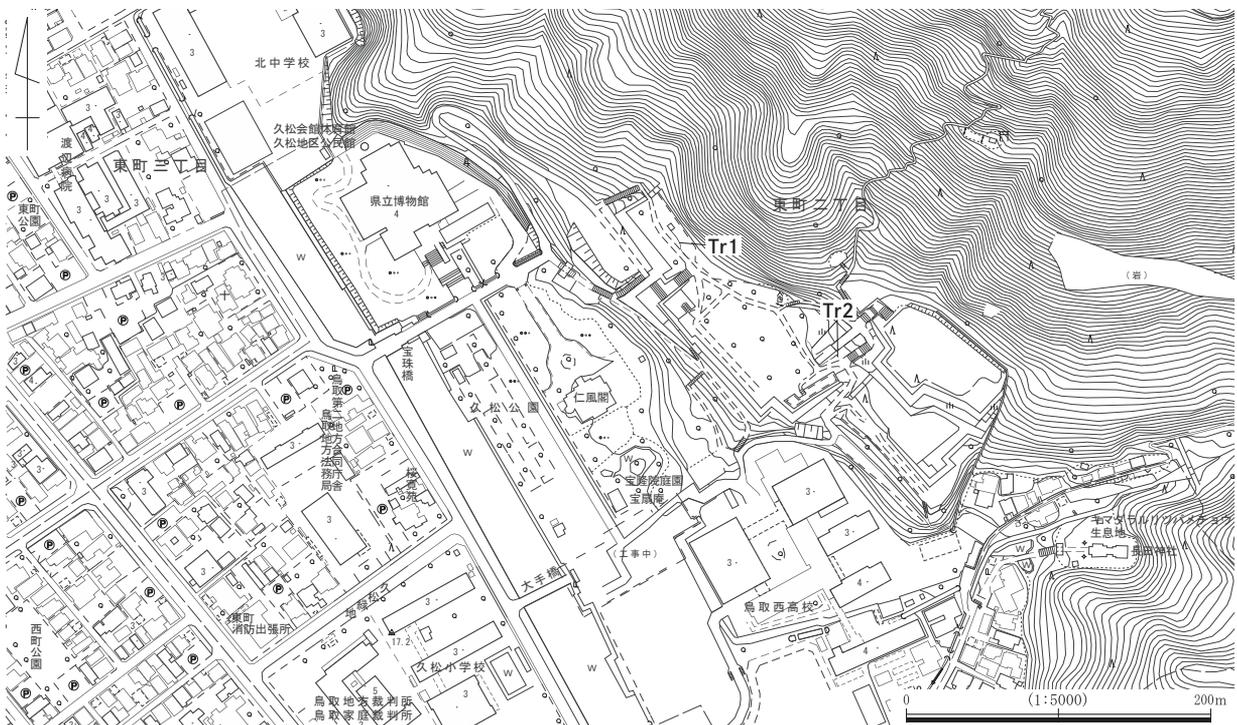
調査区の位置する鳥取城二ノ丸は近世前期と後期の一部の期間本丸として使用された曲輪であり、地表付近には当時の礎石の一部が露出する。今回の調査はトイレへの送水管が破損、水道が使用できなくなったため、破損個所の確認を目的として実施した。埋設管は、二ノ丸鉄御門外の井戸より取水し、二ノ丸内を横断するが、正確な管路は不明であったため、トイレ側と井戸側より実管を追いかけながら、管掘方内を掘削し、破損箇所を探索した。

第1トレンチ(Tr1)〔第4・5図、図版1〕

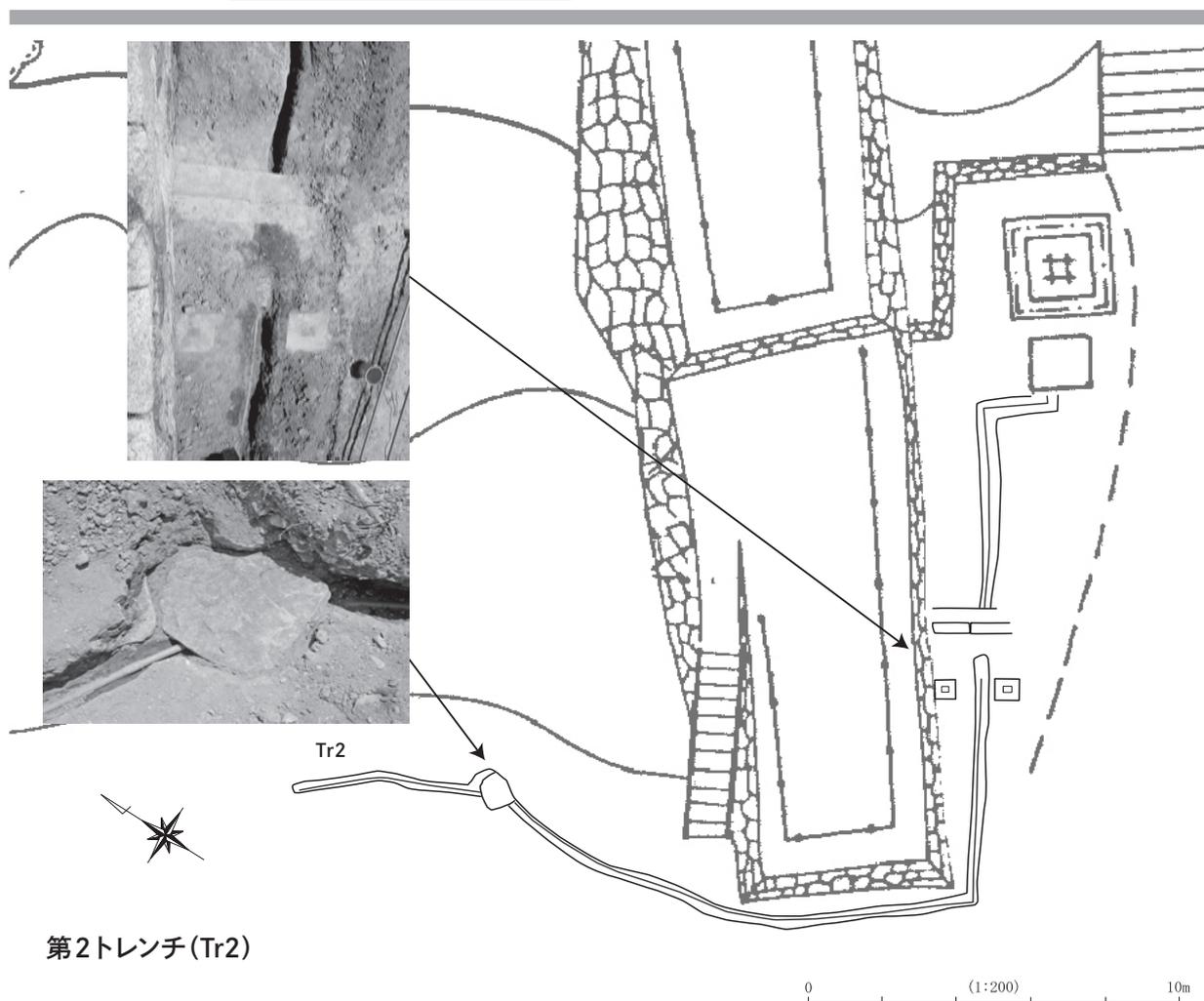
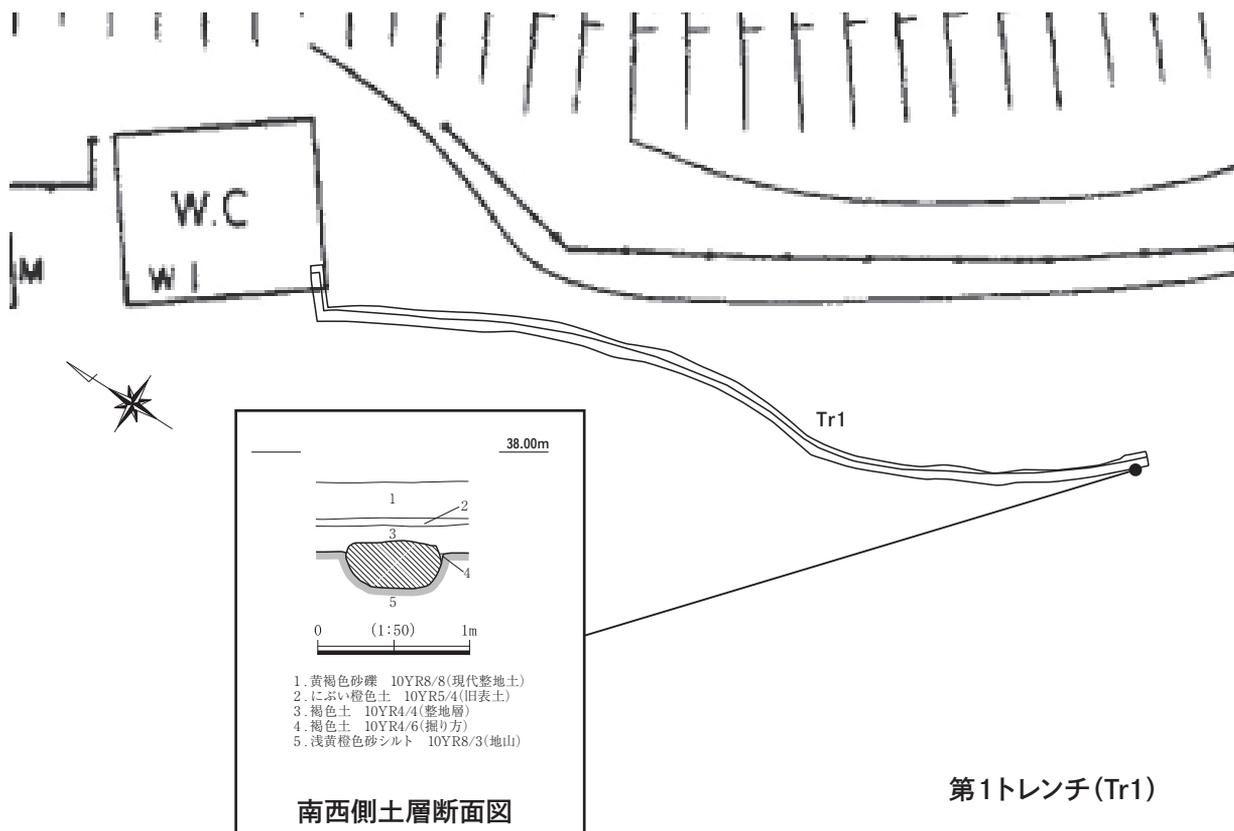
トイレ脇より続く管は地表下300mm程の位置にあり、次第に下りながら進み北側の端部付近では地表下600mmほどとなった。端部付近では管脇に旧礎石と見られる石を確認した。端部付近の南西側の断面にて礎石と見られる石を確認した。表土から20cm程度は現代の公園整備に伴う整地土で、その下には旧表土である2層、とその下には整地土とみられる3層があり、その下、標高37.3mに表面を平らに削られた地山が広がり、その地山をほぼ掘方なく掘り込み、60cm、厚さ30cmの花崗岩質の石材が据えられる。付近は弘化年間に新造された曲輪であることから、その当時の建物礎石であろうか。管は深い位置にあり、破損もみられないことから、こちら側からの掘削は取り止め、井戸側より追うこととした。

第2トレンチ(Tr2)〔第4・5図、図版1〕

井戸より続く管路は、地表下15～30cmと浅い位置にあり、鉄御門前の階段状の敷石の下を潜り、切石の門礎石間を通って、石垣を迂回しながら進む。途中の地表下10cmでは幅90cm程度の石を検出した。石は厚さ15～20cmと薄く扁平であり、隣接して同様の石材がみられる。礎石とするには大型であることから、詳細は不明ながら、近世当時の敷石とみられる。管は、この大石の下を潜って続き、その先の西端付近にて破損を確認したため、掘削をここまでとした。



第4図 鳥取城跡(第54次調査) 調査トレンチ位置図



第3節 宮長竹ヶ鼻遺跡

調査期間 令和4(2022)年2月14日～4月5日

今回の調査地である宮長竹ヶ鼻遺跡は、JR鳥取駅から南約2kmの鳥取市宮長周辺に展開する遺跡である。遺跡の北方約100mには大路川が流れ、西方約500mには千代川が流れている。この遺跡は千代川の旧流路右岸の自然堤防上の微高地に立地しており、かつて周辺は市内有数の水田地帯であった。

これまでに本遺跡は、平成元(1989)年から平成27(2015)年にかけて4回にわたる試掘調査と平成元(1989)年と令和2(2020)年の本調査が実施され、古墳時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されている。今回の調査は宅地開発計画に伴うもので、対象地にトレンチを5ヶ所設定し遺構の有無を確認した。なお、各トレンチについては、これまでの調査との混乱を避けるために次の番号から名称を与えることとした(Tr8～Tr12)。

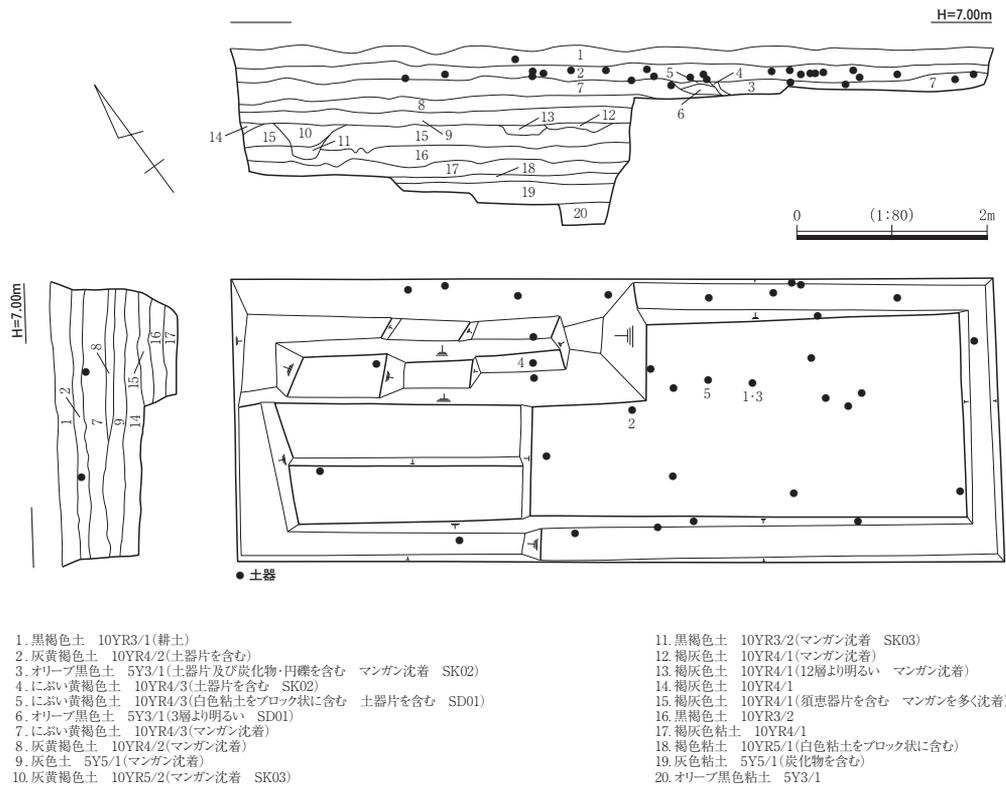
第8トレンチ(Tr8)〔第7・8・9・15図、図版1・8〕

調査対象地の南東端の休耕地に東西方向に長いトレンチ(3m×8m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に20cm程度の耕土(第1層)が認められる。続く第2層の上面で、SK01やP01～P06が検出されており遺構面と想定される。次に、第7～9層はマンガンの沈着がみられ、第7層の上面でSK02(第3・4層)やSD01(第5・6層)が検出される。この他にも、P07～P12も検出されており遺構面と想定される。この他にも、窪み状の落込み(第12・13層)が確認され、第10層および第11層は土坑(SK03)の可能性が推測される。続く第14層と第15層はマンガンが強く沈着しており、第15層と第16層の下面はやや乱れる。以下、第17～20層と続き、第18層は白色粘土をブロック状に含み、第19層は炭化物を含む。以上、遺構面は2面と想定されるが、第10層および第11層が土坑であれば3面目の可能性が推測される。

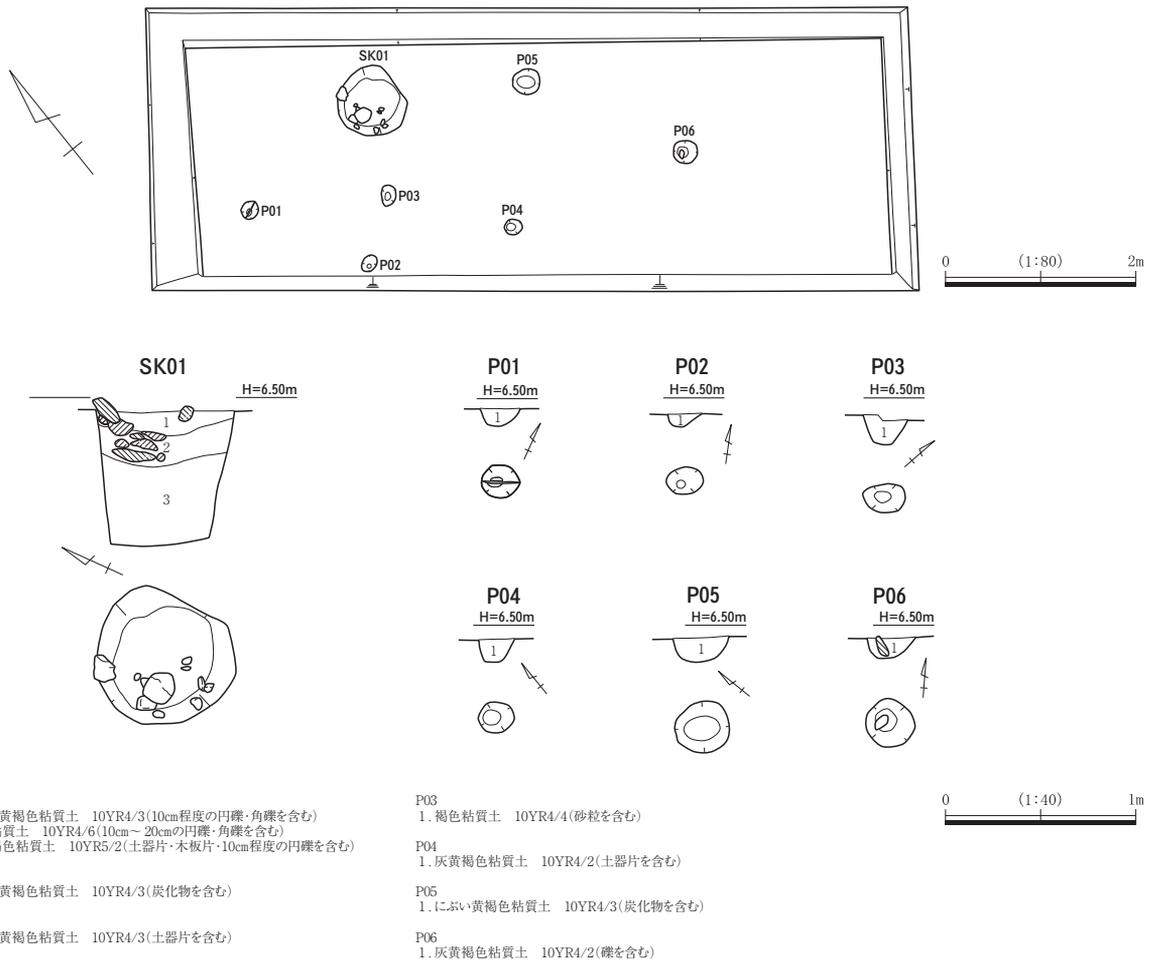
なお、遺物は耕土や第2層から土師器や瓦質土器が多く出土し、続く第7層からも土師器や奈良時代の須恵器等が出土した。また遺構では、SD01やSK01、SK02、P02、P04、P06、P09、P12から土器が出土した。出土遺物のうち、表土下層から出土した(1)～(5)の須恵器と(6)・(7)の土師器を図化した。(1)は7世紀後半に比定される杯蓋で天井部には糸切りが見られる。(2)も同じく杯蓋であるが口縁部



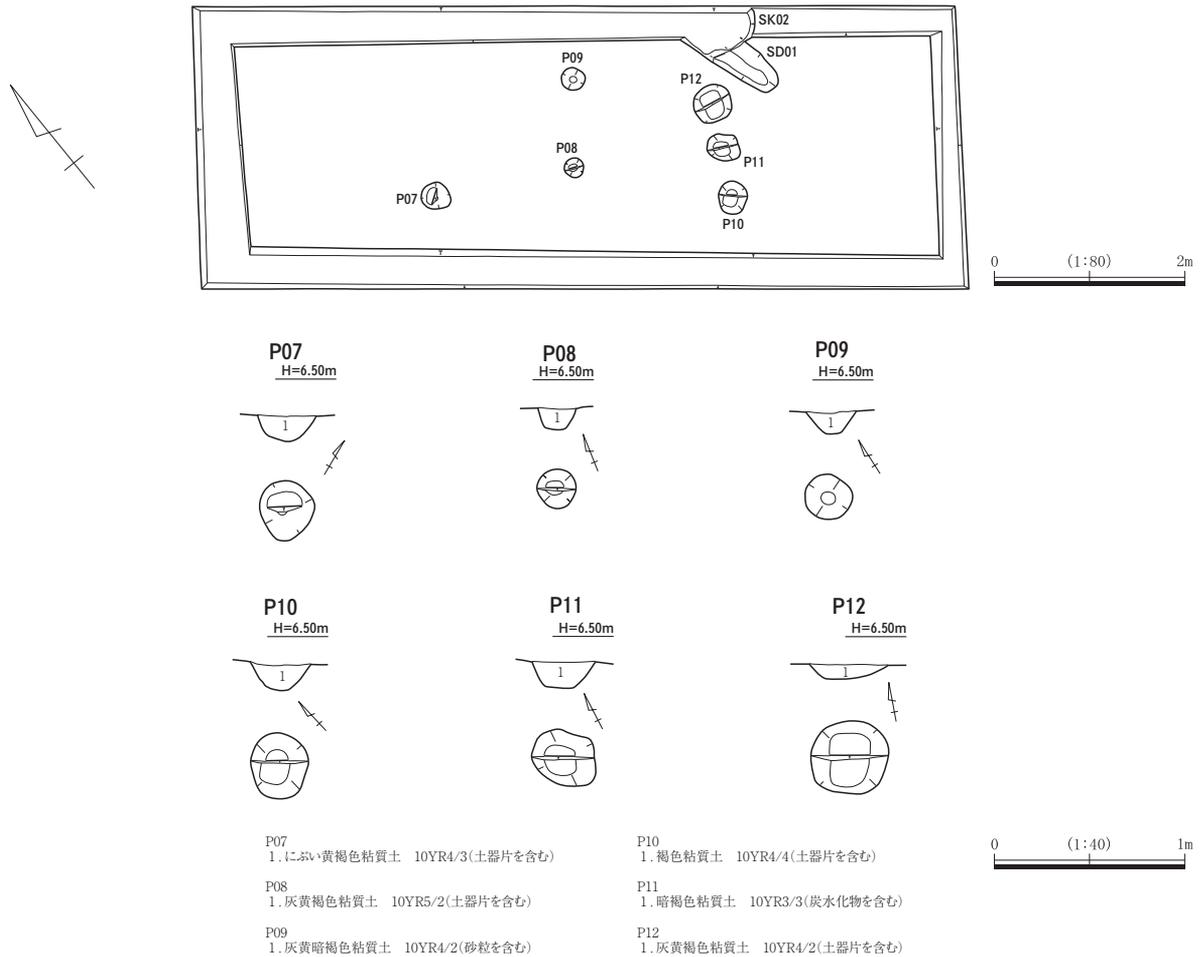
第6図 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査トレンチ位置図



第7図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ実測図



第8図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ第1遺構面実測図



第9図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ第2遺構面実測図

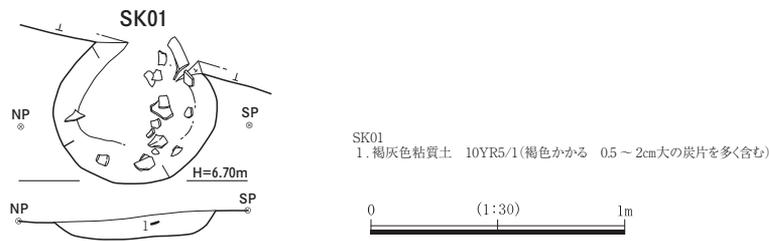
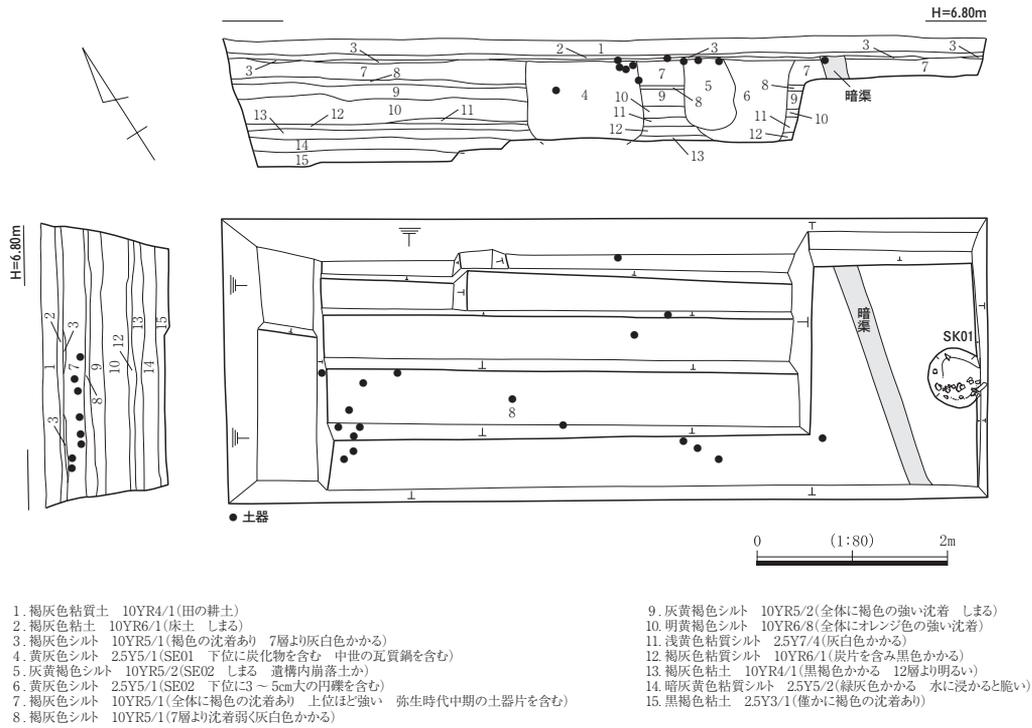
にかえりがみられる。(3)・(4)は奈良時代に比定され、(3)が杯蓋で(4)は杯身で高台がナデ付けられる。(5)は欠損しているが管状を呈する。(6)・(7)は古代前半に比定される甕の口縁部である。

第9トレンチ(Tr9)〔第9・10・15図、図版1・8・9〕

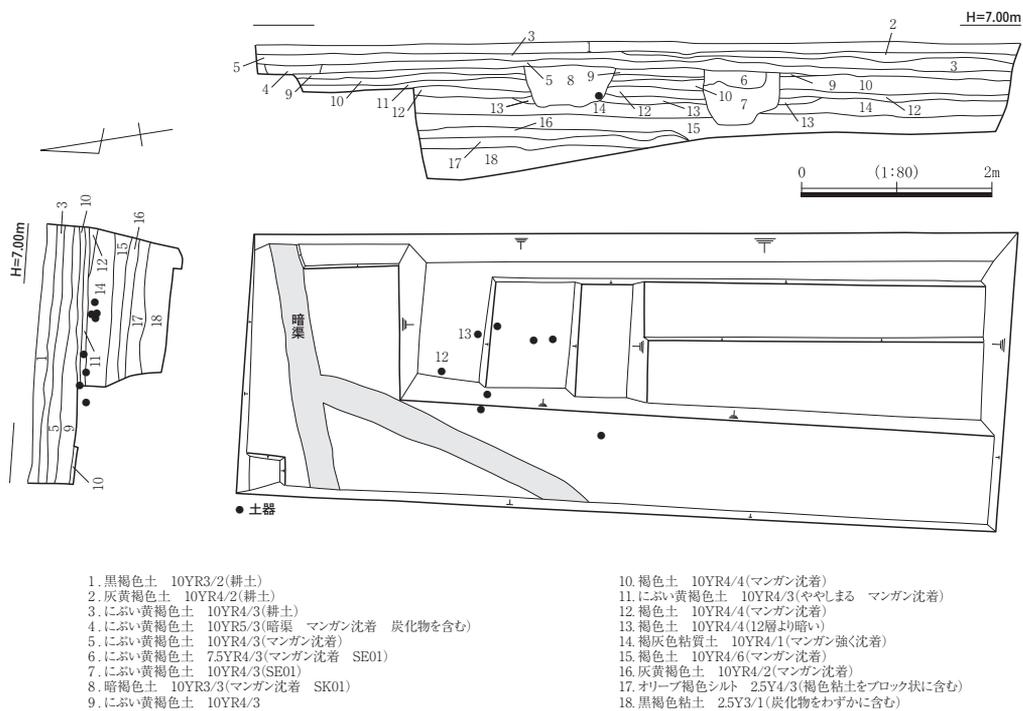
調査対象地の中央東端の旧水田に東西方向に長いトレンチ(3m×8m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に20cm程度の耕土(第1層)が認められる。その下に5cm程度の床土(第2層)が確認され、下面で現代の暗渠を確認される。続いて地表面下約25cm(標高6.5m前後)から第3、7、8層で褐色の沈着がみられ、第7層の上面でSE01(第4層)やSE02(第5層と第6層)、SK01が検出されており遺構面と想定される。続く第9層や第10層では全体に褐色やオレンジ色の強い沈着がみられる。以下、第11、12、13、14、15層が続く。以上、遺構面は1面と想定される。なお、遺物は耕土や床土等から土師器や須恵器、瓦質土器が出土し、第7層から弥生土器が出土した。また遺構では、SE01の埋土からも土師器や中世の瓦質鍋等が出土した。出土遺物のうち、耕土出土の弥生土器(8)と須恵器(9)およびSK01出土の土師器(10)、ならびにSE01出土の瓦質土器(11)を図化した。(8)は弥生時代中期に比定される頸部でナデ付けられた突帯に刻み目がみられる。(9)は古代前半に比定される杯身で高台がナデ付けられる。(10)は古代前半に比定される甕の口縁部である。(11)は中世後半に比定される鍋の口縁部である。

第10トレンチ(Tr10)〔第11・12・15図、図版2・9〕

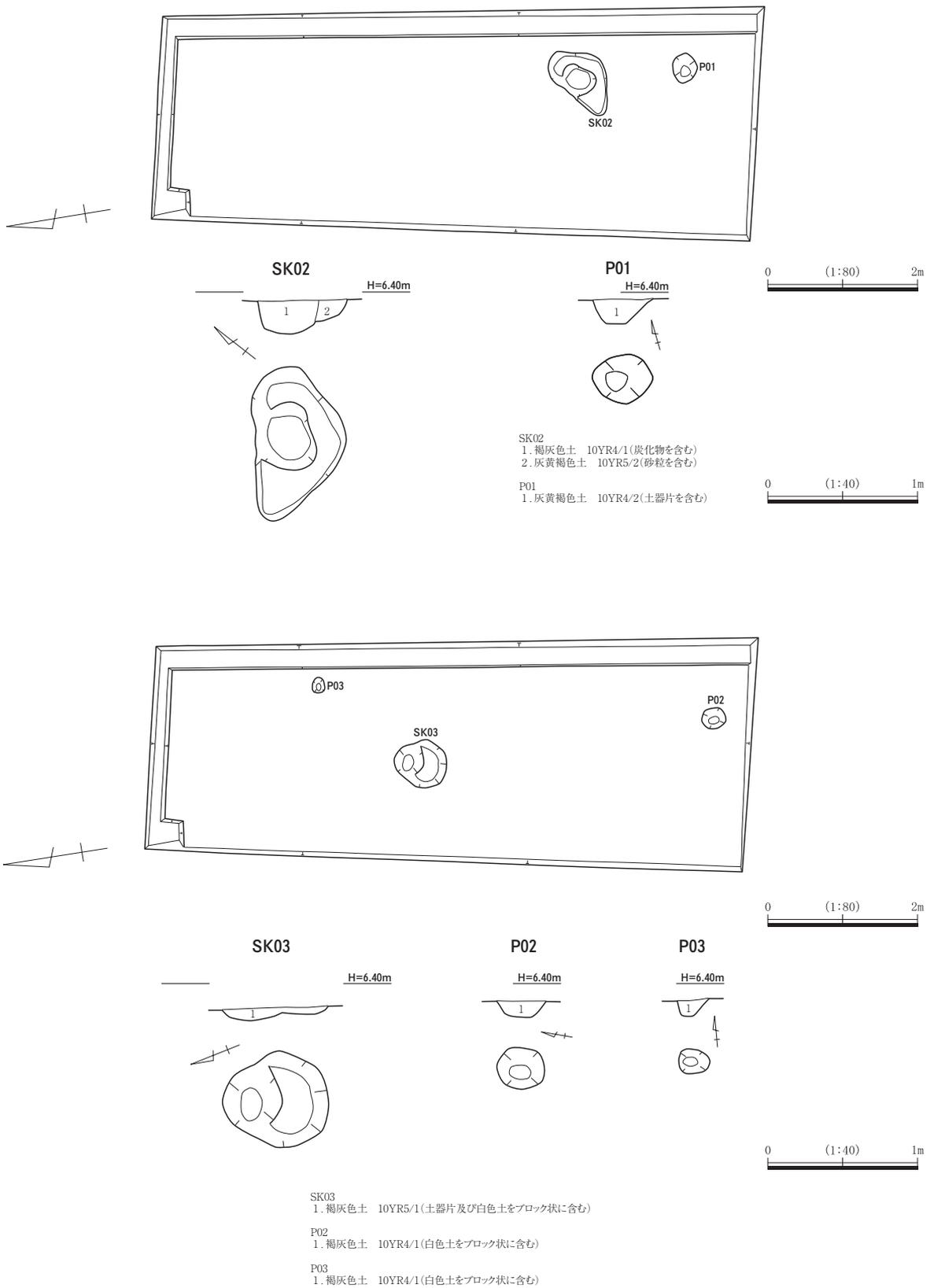
調査対象地の北東端の畑地に南北方向に長いトレンチ(3×8m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に20cm程度の耕土(第1・2層)が認められ、その下に10cm程度の床土(第3層)が確認される。続く地表面下約30cm(標高6.5m前後)には、マンガンが沈着する第5層が厚さ10cm程度堆積し、上面を掘



第10図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第9トレンチおよびSK01実測図



第11図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ実測図



第12図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ第1・2遺構面およびP01～P03・SK02・SK03実測図

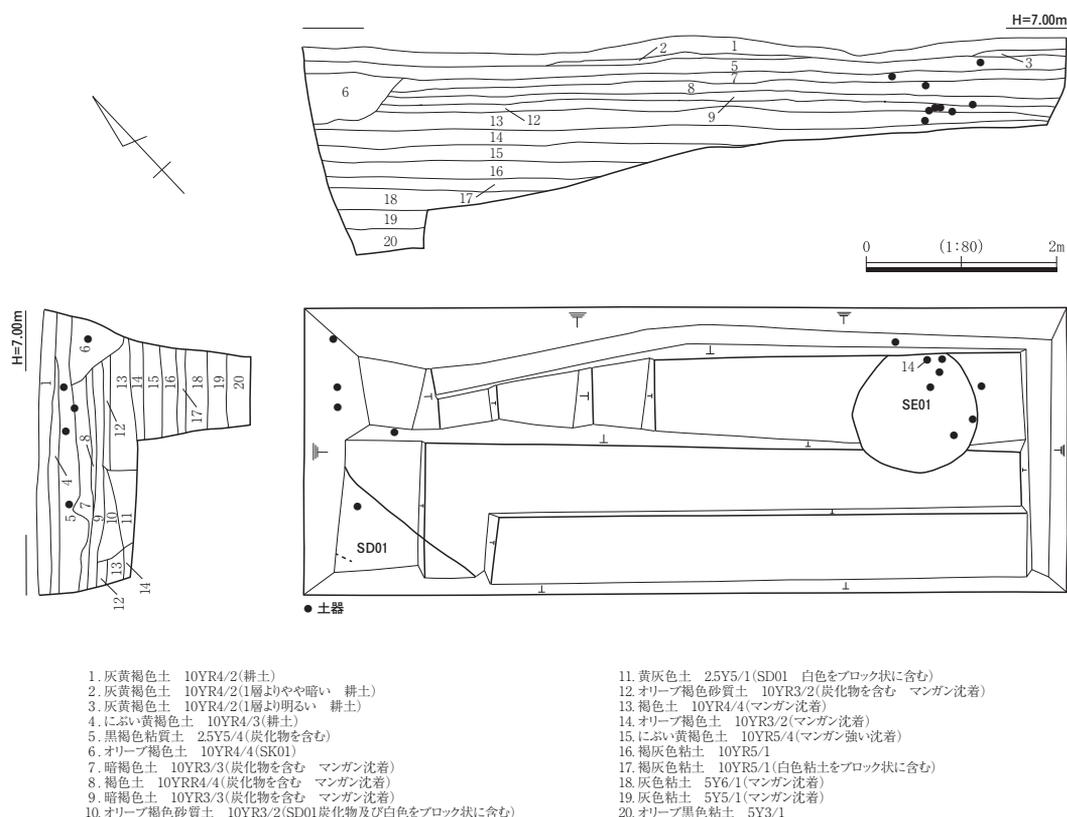
り込んで第4層の暗渠が設置される。次の第9層と第10層の上面で、SE01(第6・7層)とSK01(第8層)が検出される。この他にも、SK02とP01も検出されており遺構面と想定される。以下、第11～16層までマンガンが沈着する堆積層で、第13層と第14層の上面で、SK03やP02、P03が検出されている。以下、第17層は褐色粘土をブロック状に含み、第18層は炭化物をわずかに含む。以上、遺構面と想定される面を2面確認している。以上、遺構面は2面と想定される。なお、遺物は耕土および床土から土師器や須恵器、瓦質土器が出土し、第11～14層で土器が出土し、第17層上面でも須恵器が出土した。また遺構では、SE01やSK01、P01からも土器が出土した。出土遺物のうち、第2遺構面上面出土の須恵器(12)と土師器(13)を図化した。(12)は奈良時代に比定される杯身で高台がナデ付けられる。(13)は古代前半に比定される甕の口縁部である。

第11トレンチ(Tr11)〔第13・15図、図版2・9〕

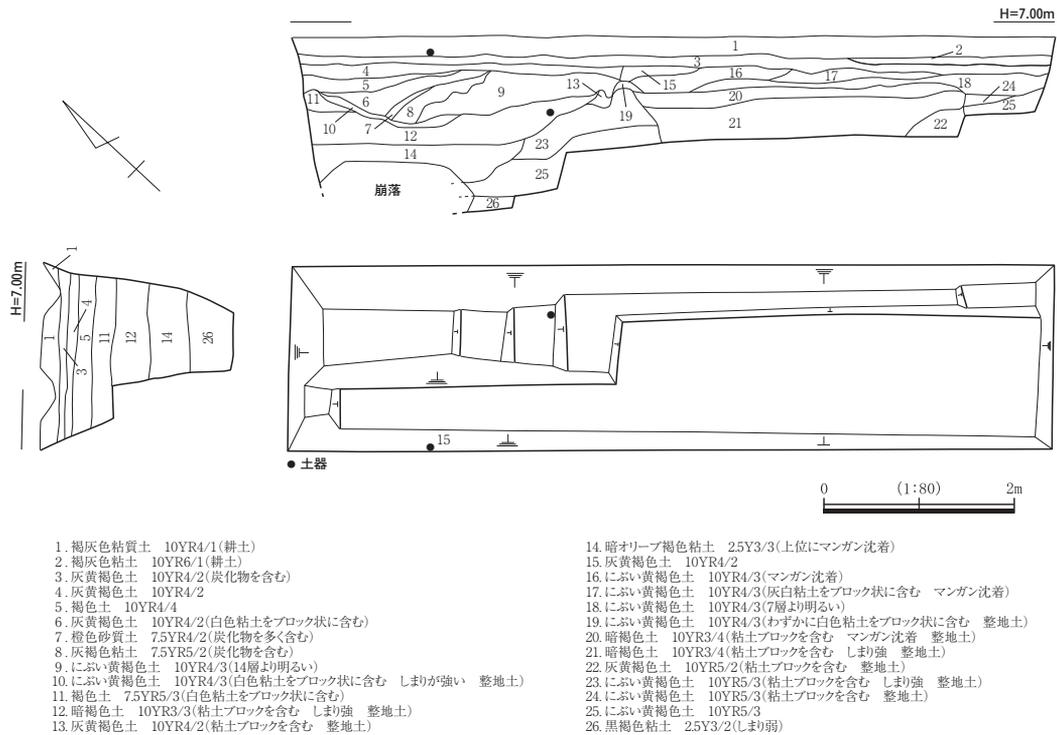
調査対象地の西端の畑地に東西方向に長いトレンチ(3×8m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に10～30cmの耕土(第1～4層)が認められ、その下に10cm程度の床土(第5層)が確認される。続く地表面下約30cm(標高6.5m前後)には、炭化物やマンガンが沈着する第7～9層が厚さ40cm程度堆積している。この第7層上面で、SK01(第6層)が検出され遺構面と想定される。また第12層の上面でもSD01(第10・11層)を検出されており遺構面と想定される。また、出土遺物の状況からSE01も同一層からの検出ではないかと推測される。以下もマンガンが沈着する堆積層が続く。以上、遺構面は2面と想定される。なお、遺物は耕土および床土から土師器や須恵器、瓦質土器が出土し、第7～9層から土師器や須恵器が出土している。また遺構では、SE01の埋土からも土器が出土した。出土遺物のうち、SE01出土の瓦質土器(14)を図化した。(14)は中世前半に比定される鍋の口縁部である。

第12トレンチ(Tr12)〔第14・15図、図版2・9〕

調査対象地の南西端の畑地に東西方向に長いトレンチ(2×8m)を設定した。調査の結果、現況の地



第13図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第11トレンチ実測図



第14図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第12トレンチ実測図

表面下に20cm程度の耕土(第1・2層)が認められ、その下に10cm程度の床土(第3層)が確認される。第4～24層は整地層と想定され、炭化物や白色粘土をブロック状に含み、比較的にしまりの強い層が多い。以下、第25層と第26層の堆積層が続く。以上、土坑やピット等の遺構は確認出来なかったが、整地層の上面が遺構面の可能性が推測される。なお、遺物は耕土および床土から土師器や須恵器、瓦質土器が出土し、整地層からは土師器や須恵器、青磁等が出土した。出土遺物のうち、耕土下層から出土した瓦質土器(15)を図化した。(15)は中世後半に比定される羽釜である。

小結

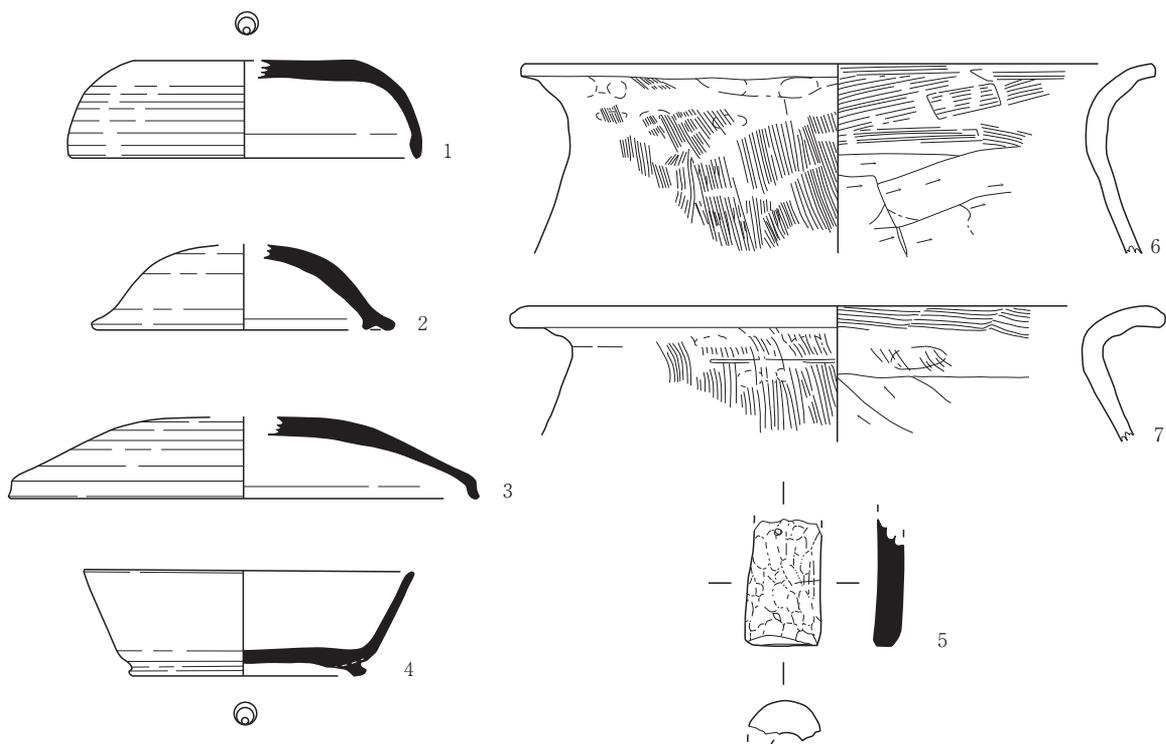
今回の調査では、第8トレンチでは2面、第9トレンチでは1面、第10トレンチでは2面、第11トレンチでは2面の遺構面が確認された。遺構は溝状遺構や井戸跡、土坑、ピット等であった。遺物は陶磁器や瓦質土器、須恵器、土師器、弥生土器などであった。今回の調査は前述した既存の発掘調査と同じく古墳時代から中世にかけての遺構や遺物が確認することが出来た。第10トレンチの北側には、平成27(2015)年に実施された第1トレンチが位置している。このトレンチは今回の調査地よりも標高が低くなっており古代前半のシルト層が確認されている。このことから、今回の調査地の周辺はやや小高い地形を呈するものと考えられ、古墳時代から中世にかけての集落遺跡が形成されていたものと想定される。

以上のことから、今回の調査地周辺には古墳時代から中世にかけての集落遺跡が遺存する可能性が考えられ、宅地開発の計画によっては発掘調査の必要性があるものと考えられる。

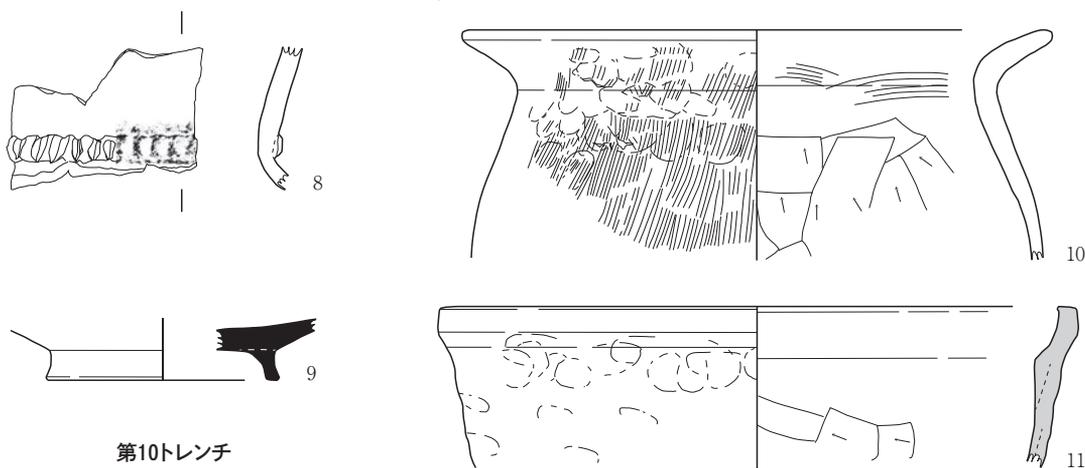
参考文献

- 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1994 『紙子谷古墳群・宮長竹ヶ鼻遺跡』
 公益財団法人鳥取市文化財団 2021 『宮長竹ヶ鼻遺跡』

第8トレンチ



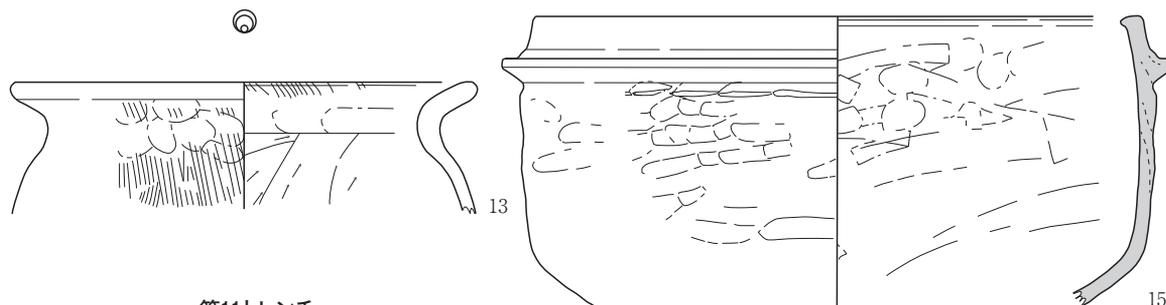
第9トレンチ



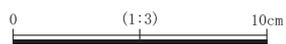
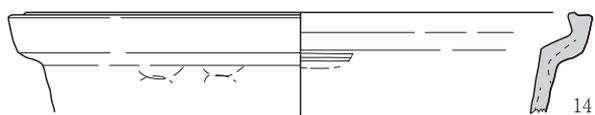
第10トレンチ



第12トレンチ



第11トレンチ



第15図 宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物実測図

第4節 上野山5号墳

調査期間 令和4(2022)年4月19～21日

今回の調査地は、鳥取県百名山とされる稲葉山(標高248.9m)北側の鳥取市福部町久志羅上野にあたる。稲葉山は鳥取市福部村と国府町との境に連なる尾根沿いの標高200～300mの丘陵全体を指す。因幡山や稲羽山とも記され、江戸時代には宇倍野山や上野山とも称されたようである。『因幡民談記』によると、山上には上野と呼ばれる平坦な箇所があるとされ、「上野」は宇倍神社の裏山であることから、宇倍野が転訛したものと考えられる。

上野山5号墳は旧福部村教育委員会が平成5～6(1993～1994)年にかけて実施された遺跡分布調査によって確認された古墳である。調査対象地付近では上野遺跡で弥生土器や石斧等の石製品が採取されている。稲葉山の南麓には伊福吉部徳足比売の墓をはじめとする数多くの古墳が築かれ、国指定史跡の因幡国庁跡や因幡国分寺等の遺跡が所在している。

今回の調査は太陽光パネル建設に伴い実施され、上野東公民館北側の丘陵部にトレンチを2ヶ所設定し、遺構の有無を確認した。

第1トレンチ(Tr1)〔第17図、図版3〕

第1トレンチは、工事計画地内にみられる古墳状に盛り上がる地点の裾部に直行したトレンチ(1×5m)を設定した。調査の結果、地表面下10cm程度が表土(第1層)である。第2層(灰黄褐色土)から第10層(にぶい黄褐色土)までは、比較的にしまりが弱く腐植土や白色土をブロック状に含んでおり、盛られた土である可能性が考えられる。続く第11層(黄褐色土)はベースの層と考えられる。

なお、遺構は確認されず、遺物も出土していない。

第2トレンチ(Tr2)〔第18図、図版3〕

第2トレンチは、第1トレンチと同じく丘陵上に東西方向に長いトレンチを(1.5×6.0m)を設定した。調査の結果、地表面下約40cmが表土(第1層)である。第2(褐色土)～4層(褐色土)が続き、第5層(黄褐色土)がベースの層であると考えられる。

なお、遺構は確認されず、遺物も出土していない。

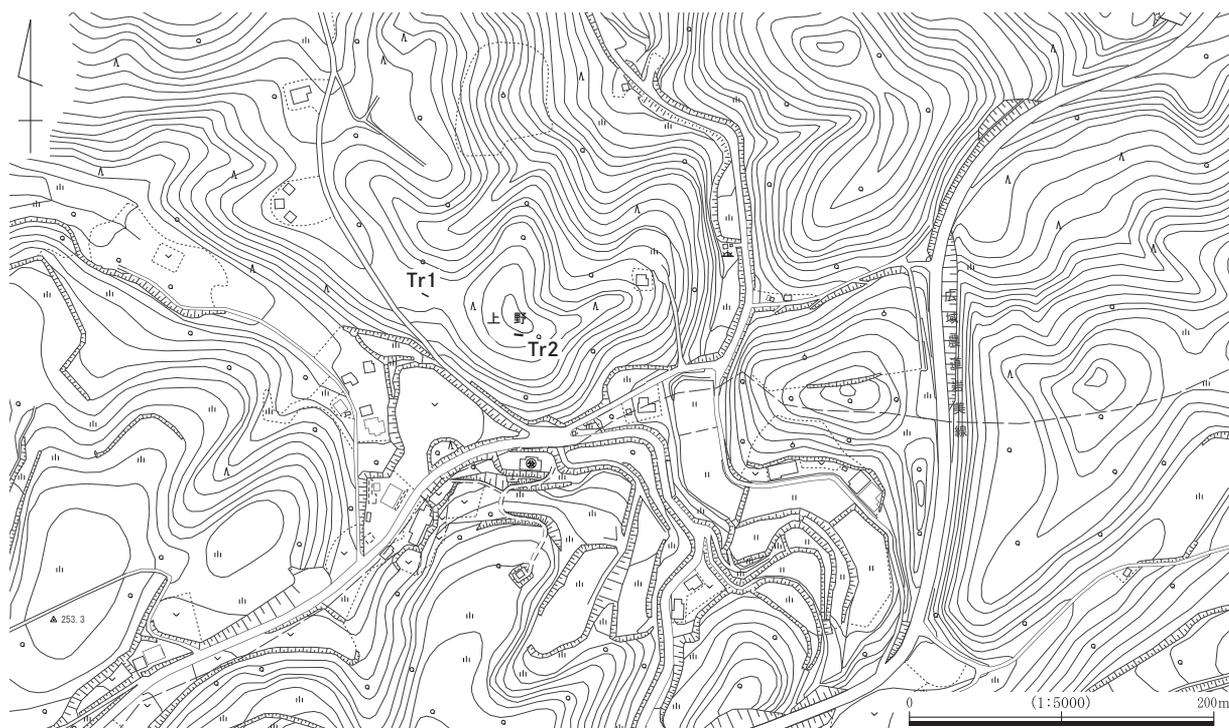
小結

今回の調査では、第1トレンチと第2トレンチのともに、明確な遺構・遺物が確認することができず自然堆積層が確認されただけであった。前述したが、上野山5号墳は旧福部村教育委員会が実施した遺跡分布調査で確認された古墳である。今回は確認できなかったものの周辺には、上野遺跡や前方後円墳の上野山6号墳(全長22m)が所在する可能性が報告されている。稲葉山の南麓には伊福吉部徳足比売の墓をはじめとする数多くの貴重な遺跡が所在している。今回の調査対象地の周辺は、縄文時代から古墳時代の遺跡が所在する可能性が推定される。周辺の開発等に際しては、十分に注意する必要があると推定される。

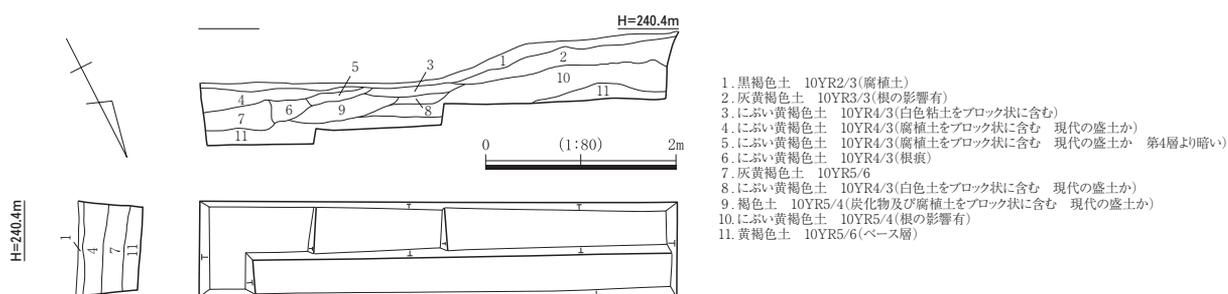
参考文献

福部村教育委員会 1995『福部村内遺跡発掘調査報告書』

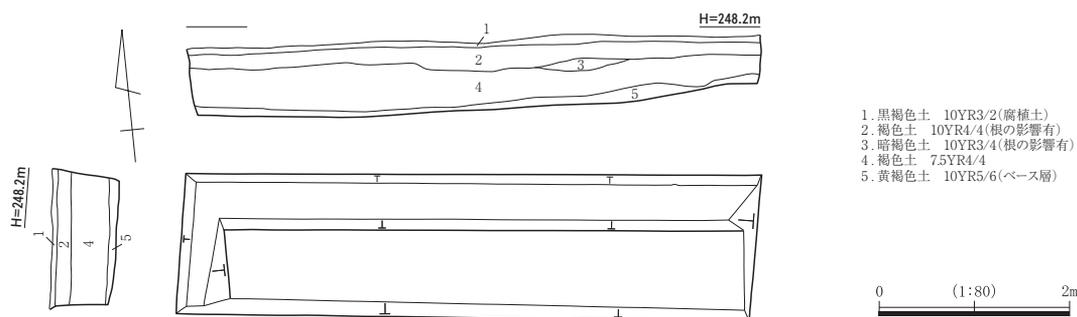
有限会社平凡社地方資料センター 1992『鳥取県の地名』



第16図 上野山5号墳 調査トレンチ位置図



第17図 上野山5号墳 第1トレンチ実測図



第18図 上野山5号墳 第2トレンチ実測図

第5節 秋里遺跡

調査期間 令和4(2022)年8月1～23日

秋里遺跡は旧千代川左岸自然堤防上、鳥取市秋里および江津に広がる弥生時代中期～中世、近世にかけての集落遺跡である。遺跡の初源はさらに遡る可能性をもち、遺構に伴わないものの弥生時代前期や縄文時代晩期突帯文土器が出土している。遺跡は現地標高3m前後の南北約700m、東西約600mの広大な範囲におよび、これまでに小規模な調査も含め第30次以上におよぶ発掘調査が行われている。

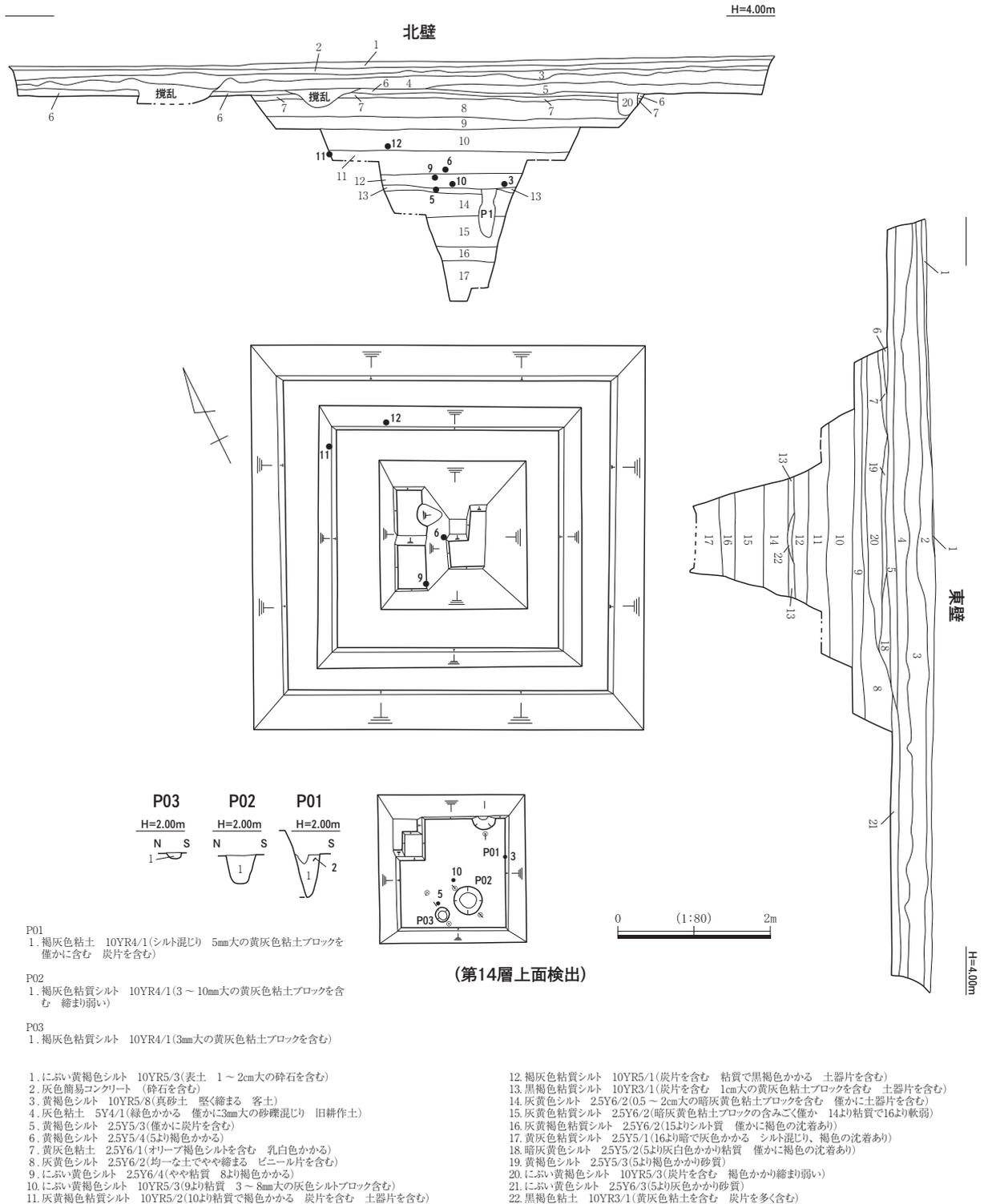
第1トレンチ(Tr1)〔第20・21図、図版3・9・10〕

今回の調査地第1トレンチは、国道9号線秋里バイパス交差点の南東に位置する、標高3.4～3.6mの空き地である。地目としては水田であるが、近年埋め立てられ一時的に駐車場として利用されていた。今回の調査地から南東900mにそびえるマンションの建設に伴い平成7(1995)年度に発掘調査が行われ、12～13世紀の掘立柱建物跡や井戸、土坑、溝等が調査され、須恵器蓋坏、黒色土器碗、土師器坏皿類・柱状高台・鍋、瓦質鍋・支脚、白磁碗・皿などが出土している。今回の調査は宅地開発に伴うもので、重機により10m四方の客土を除去した後、共有道路交差点予定箇所に5.1×5.1mの第1トレンチを設定した。

第1～3層は真砂土や碎石・コンクリート埋め立て土(客土)、第4層は埋め立て前の水田耕作土である。第4層下はトレンチ西側で土坑状の攪乱が認められるが、東側では第5層下に第18～19層を埋土とする幅25cm、深さ28cm程度の溝状遺構が検出された。ただ基盤となる第8層中には煙管や土器・染付細片とともにナイロン紐やガラス片などを含むことから、近代以降と思われる。標高2.65mで確認された第9層は僅かながら播鉢片・染付細片などが出土しており近世以降と思われる。標高2.50mに広がる第10層からは土師器細片を中心に、瓦質土器片、土錘等が出土しており中世以降に形成された層と考えられる。標高2.20mの第11層および第12層には、底部糸切りの土師器皿片やく字状口縁の鍋や瓦質鍋片など遺物が多く含まれ、第13層は炭化物を多く含む黒褐色粘質シルト層で、土師器坏皿片が出土している。第14層上面で検出したP01～03のうちP01は第13層を掘り込んでおり、埋土から土師器皿(第21図2)や



第19図 秋里遺跡 調査トレンチ位置図



第20図 秋里遺跡 第1トレンチ実測図

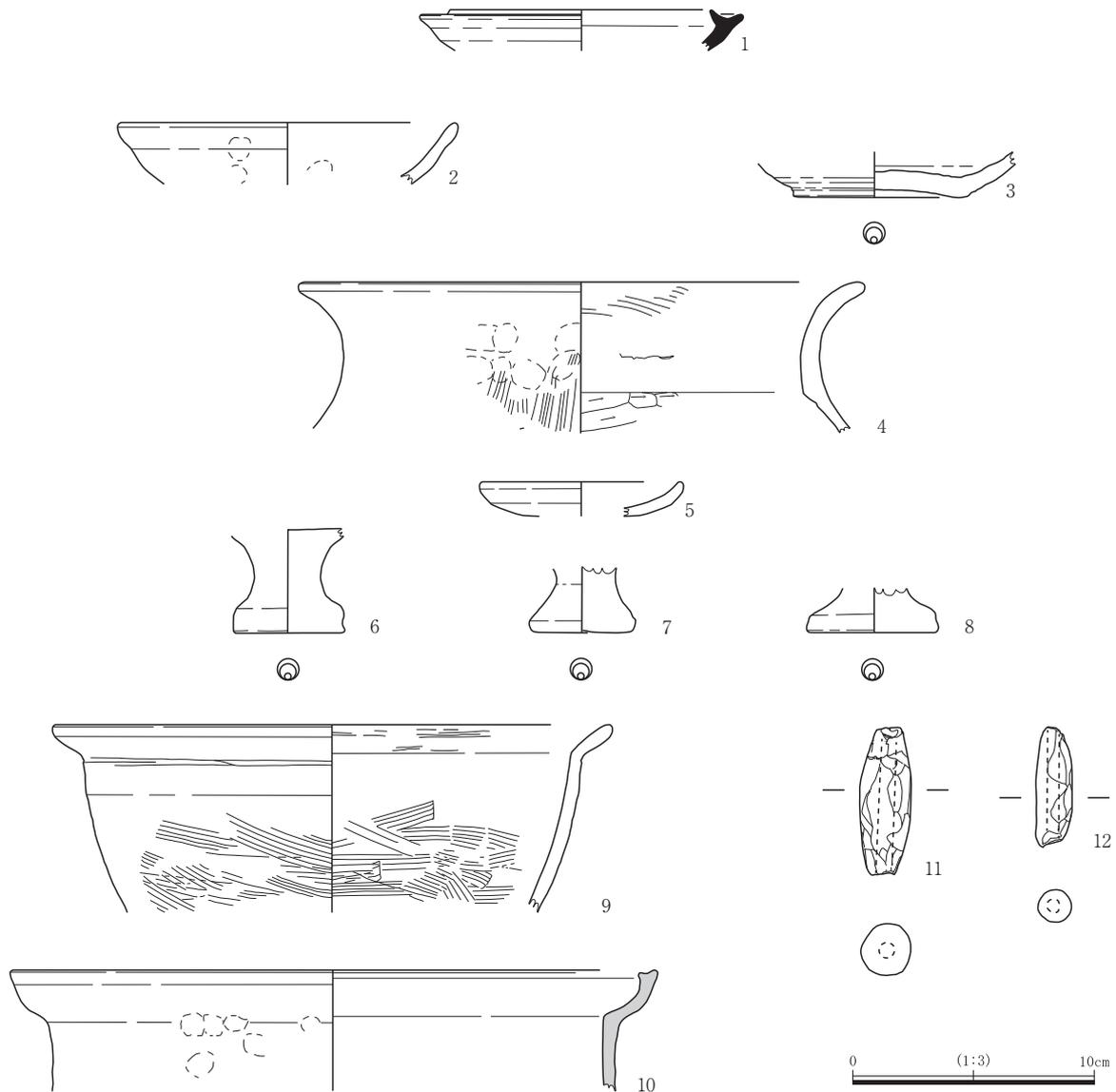
底部糸切り柱状高台部(7)(8)が出土している。P02、P03についても本来第13層からの掘り込みと考えられる。以下、第14層で土師器甕片や須恵器坏身片などを出土したが遺物量は極端に少なくなり、第15~17層は無遺物層である。標高0.2mまで掘り下げたが、秋里遺跡の所謂最終基盤層である青灰色粘土は確認できなかった。

出土遺物はコンテナ約2箱分に及ぶがその多くは第11~13層の出土、土師器底部糸切りの坏皿類、く字状口縁部の甕及び鍋、瓦質鍋そのうち(第21図1)~(12)を図化した。第10層から管状土錘(12)、第11

層から底部糸切り柱状高台部(6)、管状土錘(11)、第12層から底部糸切り土師器坏の円盤状底部(3)、土師器鍋口縁部(9)、瓦質鍋(10)、第13層から土師器皿(5)、第14層から須恵器蓋坏の坏身受部(1)、土師器甕口縁部(4)、P1から土師器皿の口縁部(2)、土師器皿の柱状高台部(7)(8)を図化した。(4)は弓なりに外湾する口縁部は内面に斜位ハケ目後ナデ、頸部外面は横位の指ナデ、内面頸部以下ヘラ削り調整。(7)・(8)は底部糸切で上面剥離面である。(9)は体部内外面斜位ハケ目後口縁部内外ヨコナデ調整である。

小結

調査地周辺は、12～13世紀代を中心とする遺物包含層が70cm以上と厚く堆積するとともに、標高1.75m前後に良好な状態で遺構面が内包されていることが確認された。また、この遺構面の基盤層から奈良時代遺物が出土していることから、周辺に当該期の遺構面が広がる可能性と、上層での肥前陶磁器やすり鉢の出土などから、近世についても注視しておく必要がある。



第21図 秋里遺跡 出土遺物実測図

第6節 布勢鶴指奥墳墓群

調査期間 令和4(2022)年9月9日

布勢鶴指奥墳墓群は、湖山池から南東約0.6kmに展開する弥生墳丘墓・中世墓群である。今回の調査は携帯電話基地局設置に伴い実施されたもので、調査対象地は標高約20~30mの北に延びる丘陵西側の緩やかに下る丘陵裾部の平坦面である。この平坦面にトレンチを1ヶ所設定し、遺構の有無を確認した。

第1トレンチ(Tr1)〔第23図、図版4〕

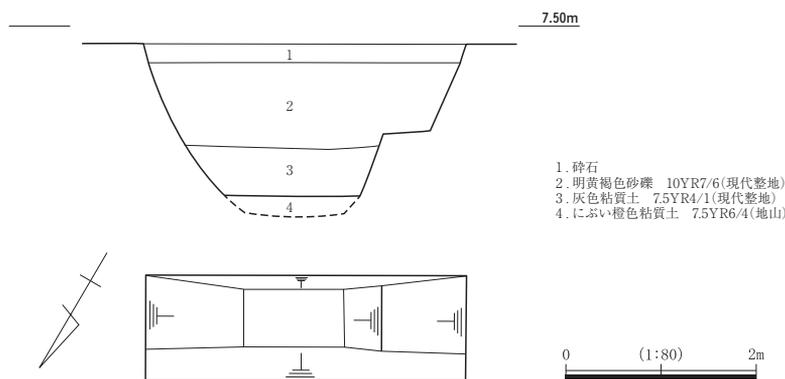
トレンチは工事予定地の範囲(3.3×1.1m)を重機で掘削した。標高約7.26mの地表から20cmには碎石が敷かれる。第2層は、厚さ100cm、その下第3層は厚さ50cmを測り、ともに地山由来の土であるとみられるが、二次的に敷きならされたものである。最下層の第4層は地山であるが、その土質より、本来の表層部分ではなく掘り下げられた深い位置に相当するとみられることから、土地自体がかなり改変されていると想定される。なお、遺構は確認されず、遺物も出土していない。

小結

今回の調査では明確な遺跡は確認できなかったが、調査地周辺は貴重な集落遺跡や古墳群等が多数所在していることから、今後も開発等に際しては、十分に注意を要するものと考えられる。



第22図 布勢鶴指奥墳墓群 調査トレンチ位置図



第23図 布勢鶴指奥墳墓群 第1トレンチ実測図

第7節 良田平田遺跡

調査期間 令和4(2022)年9月7~12日

良田平田遺跡は湖山池南岸の鳥取市良田に所在している。今回の調査は駐車場の造成に伴い実施されたもので、調査対象地は湖山池南岸の良田地区と高住地区の間に延びる丘陵西側に位置し、緩やかに下る丘陵裾部の平坦面である。この平坦面にトレンチを1ヶ所設定し遺構の有無を確認した。

第1トレンチ(Tr1)〔第25図、図版4〕

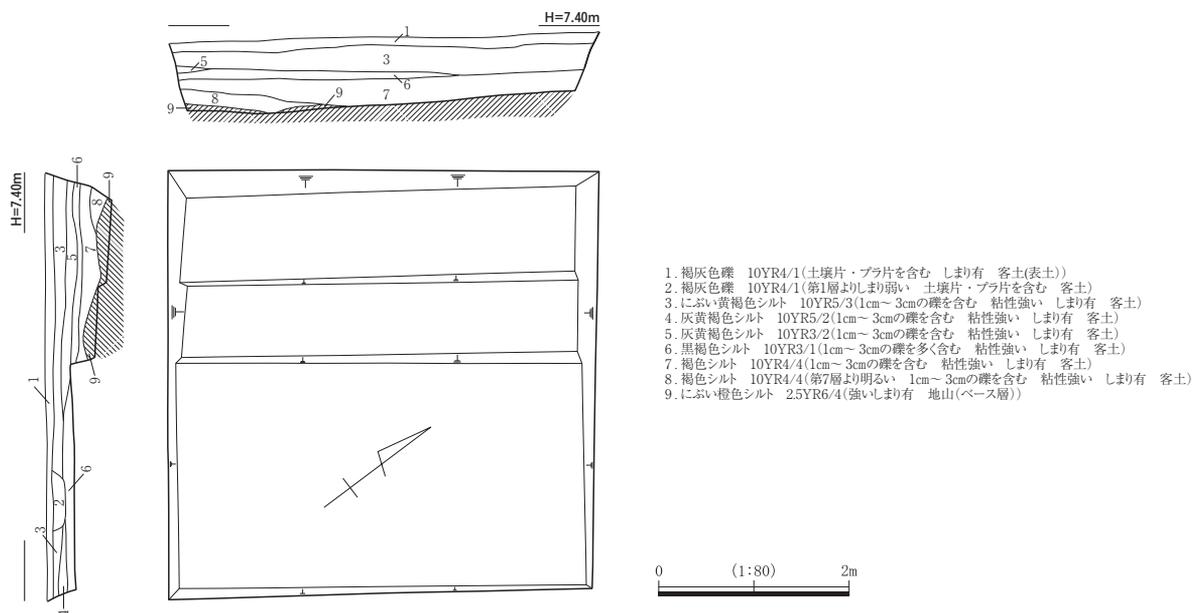
工事予定地の範囲(4.5×4.5m)にトレンチを設定した。地表面下10cm程度が表土(第1層)で碎石が敷設されているため重機掘削を行った。客土と考えられる第2~8層まで続き、その下層の第9層は地山(ベース層)と想定した。遺構は確認されず、遺物は第3層から土錘が1点出土した。

小結

今回の調査では明確な遺跡は確認できなかったが、良田地区は湖山池南岸に位置しており周辺には貴重な集落遺跡と古墳群が多数所在している。今後も周辺の開発等に際しては、十分に注意を要するものと考えられる。



第24図 良田平田遺跡 調査トレンチ位置図



第25図 良田平田遺跡 第1トレンチ実測図

第8節 栗谷所在遺跡

調査期間 令和4(2022)年9月25日～10月20日：(Tr1～5)

令和5(2023)年6月5～19日：(Tr6～8)

栗谷所在遺跡は、鳥取城南東側、栗谷川北岸の山裾に位置する。明治3(1870)年に、池田家が神道に切り替えるまで鳥取藩池田家の菩提所とされていた。現在、江戸期の建物は本堂のみが残り、書院北側には池田光政の時代に築庭されたという池泉鑑賞式の庭園が残っている。この庭園は昭和12(1938)年測量が行われ、その後流土等の堆積によって谷部や園路等が消失している。

令和4(2022)年度の調査はトレンチで堆積状況の確認した後、堆積土を撤去し測量が行われた当時の主要庭園部を復元整備することが目的である。なお、トレンチ名は調査区番号に合わせ、調査区1を第1トレンチ・調査区2を第2トレンチ・調査区3を第3トレンチ・調査区4を第4トレンチ・調査区5を第5トレンチとしている。

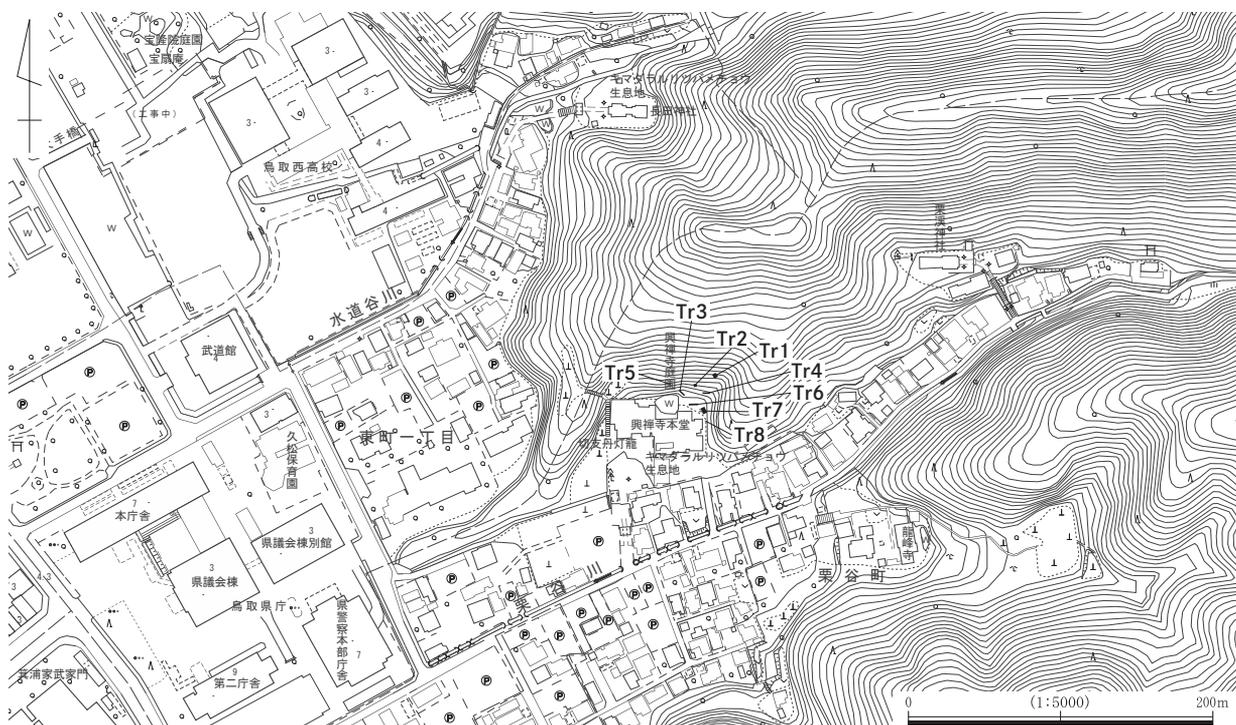
次に、令和5(2023)年度の調査は測量図にみられる溝を確認し、池から排水用の溝を整備することを目的とし、溝の確認のために調査を実施した。なお、トレンチ名は4年度の調査との混乱を避けるために次の番号から名称を与えることとした(第6～8トレンチ)。

令和4(2022)年度の調査

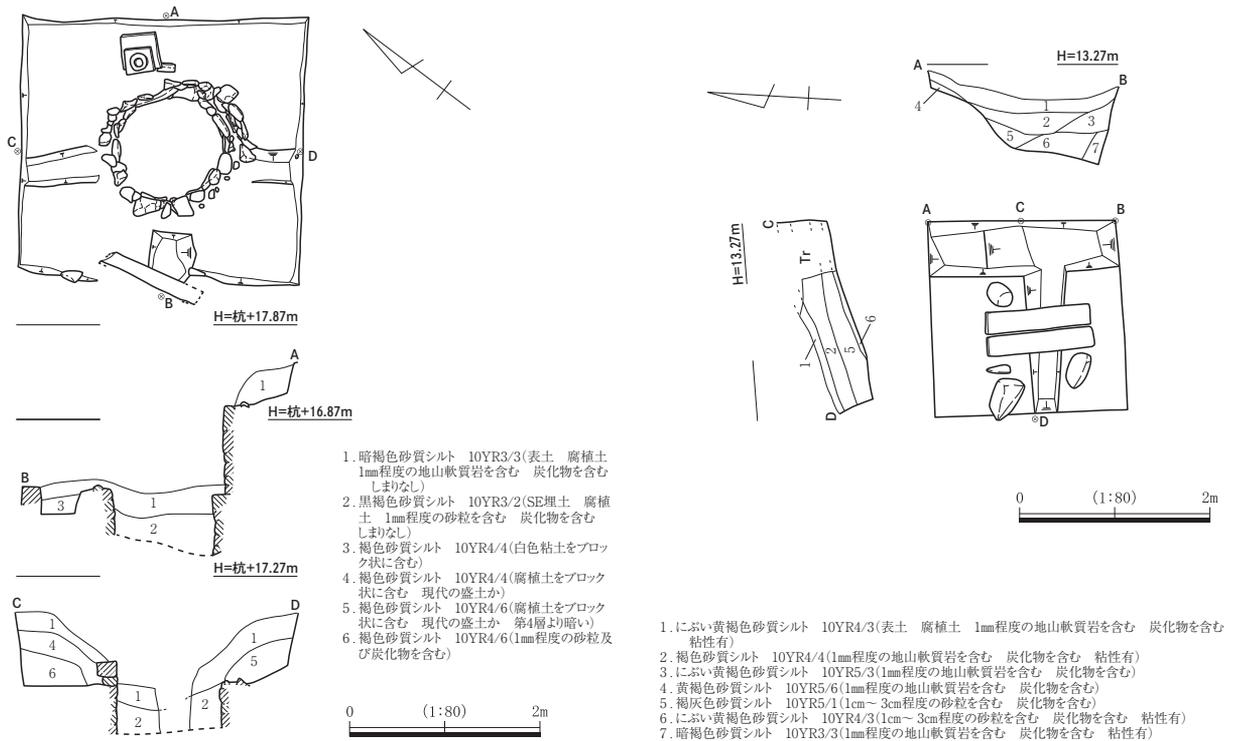
第1トレンチ(Tr1)〔第27・34図、図版4・10〕

調査対象地の北東端には埋没した井戸跡が確認され、この井戸跡を囲むように正方形のトレンチ(3×3m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に40cm程度の表土(第1層)が認められる。表土掘削後、井戸跡が検出された。井戸跡はほぼ円形で斜面上位に対し、さらに石積みを行っている。直径は約1.5m、深さは1mを超え、埋土は第2層である。井戸跡は第3～5層を掘り込んでいると思われる、以下第6層が続く。

出土遺物は表土から土師器や陶磁器、瓦が出土し、井戸跡の埋土からは、陶磁器や挿鉢、ガラス片、第3～5層から表土から土師器や陶磁器、瓦が出土している。出土遺物のうち、表土から出土した19世



第26図 栗谷所在遺跡 調査トレンチ位置図



第27図 栗谷所在遺跡 第1トレンチ実測図

第28図 栗谷所在遺跡 第2トレンチ実測図

紀に比定される瓦(1)を図化した。

第2トレンチ(Tr2)〔第28・34図、図版4・10〕

調査対象地のほぼ中央には谷部をまたぎ石橋が配置されており、この石橋を囲むように正方形のトレンチ(2×2m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に30cm程度の表土(第1層)が認められる。第2層は粘性を有し、溪流によって流入した堆積層と推測される。以下、第3～7層は斜面上位からの堆積層と想定される。

出土遺物は表土から陶磁器や瓦が出土し、第2層から陶磁器や近世の播鉢、瓦が出土している。出土遺物のうち、第2層から出土した陶磁器(2)を図化した。

第3トレンチ(Tr3)〔第29図、図版5〕

調査対象地の南側、溪流が池へと流れ込み地点に南北方向に長いトレンチ(1×5m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に15～20cm程度の表土(第1・2層)が認められ、第1層および同じく第5層は溪流の影響によって堆積した層と想定される。第3層や第4、6、7層は斜面上位からの堆積層と考えられる。

出土遺物は表土から陶磁器や瓦が出土し、第5層から土師器や陶磁器、タイル片が出土している。

第4トレンチ(Tr4)〔第30・34図、図版5・10〕

調査対象地の東端の平坦部、消失した園路や建物跡の存在を確認するために東西方向に長いトレンチ(1×4m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に10cm程度の表土(第1層)が認められ、第2層や第3、7、14層と斜面上位からの堆積層が続く。第8～10層を掘削中に石段状遺構を検出した。さらに、石段状遺構の西側で土坑状遺構(SK01)を検出した。第11層は土坑状遺構(SK01)の埋土で、第12層は3～5cm程度の礫を含んでおり、石段状遺構の裏込土と想定される。以下、第13・15層と続く。

出土遺物は、表土から土師器や陶磁器、瓦、ガラス、鉄製品が出土し、第2層から土師器や陶磁器、プラスチック片、第14層から土師器や陶磁器、瓦が出土している。同じく第11層の土坑状遺構(SK01)

の埋土からも土師器や陶磁器、瓦が出土している。出土遺物のうち、表土から出土した陶磁器(3)・(4)を図化した。

第5トレンチ(Tr5)〔第31図、図版5〕

調査対象地の西端には築山が築かれている。盛土の修復前に、景石の据え付け状況と築山に転在する瓦片の性格を明らかにするため、景石の裏側に南北長いトレンチ(1.0×0.5m)を設定した。調査の結果、現況の地表面下に10cm程度の表土(第1層)が認められ、第2層からは19世紀の瓦が多量にみられ、築山時の盛土の可能性が想定される。以下、第3・4層と堆積層が続く。

出土遺物は第1～4層から陶磁器が出土し、第1・2層で瓦が出土している。

令和5(2023)年度の調査

第6トレンチ(Tr6)〔図版5〕

第6トレンチは現在も残る溝の埋土を掘削した。遺物などは出土しなかった。

第7トレンチ(Tr7)〔第32・34図、図版6・10〕

第7トレンチは、庭園東側の茶室付近に測量図にみられる溝の推定ライン上に直交する方向でトレンチを設定した。

第1層は10cmほどの表土で盛土と考えられる。次に、第2～10層(A-A'断面)および第2～7層(B-B'断面)も盛土と考えられ、茶室を建てる際やその際の作庭時に盛られたものと考えられる。遺構は第3層(A-A'断面)下面でピット(P01)が検出された。P01は2層に分けられ、柱痕が確認された。また、埋土から近世の瓦片や木片が出土しており、柱を建てる際の裏込めしたと考えられる。次に、第1層(B-B'断面)下面で土坑状遺構(SK01)が検出された。SK01の埋土は3層に分けられ、P02を掘り込んで形成される。埋土からは京焼風陶器等の陶磁器や近世の瓦が出土した。SK01は隅丸長方形を呈すると想定され、第7トレンチ南側の調査区外に延びている。P01およびSK01、P02は埋土が非常によく似ていることから、ほぼ同時期に形成された可能性が想定される。第7トレンチ付近には、茶室の前に土蔵が建てられており、これらの遺構は茶室または土蔵に関わる可能性が想定される。第13層(A-A'断面)および第9層(B-B'断面)が測量図にみられる溝の可能性が推定される。溝は南北方向に延びると推定され、埋土は炭化物を含む細砂であった。東側の壁面は、地山を掘り込むことで形成されたと考えられる。西側の壁面は第12層(A-A'断面)および第8層(B-B'断面)と推定される。以上、第7トレンチでは遺構面を表土(A-A'断面：第1～3層・B-B'断面：第1層)下面で1面、溝埋土(A-A'断面：第13層・B-B'断面：第9層)上面で1面が確認された。

出土遺物は主に盛土内から越前や瀬戸美濃、在地などの陶磁器や瓦、銅製品、ガラス片等が出土し、時期は18世紀後半以降が中心であった。また、溝と推定される埋土からもほぼ同時期の遺物が出土した。出土遺物のうち、盛土内から出土した瓦(10・12・14)と溝の埋土から出土した陶磁器(5)～(9)と瓦(11・13)を図化した。なお、第7トレンチから出土した瓦(13・14・15)には刻印がみられた。

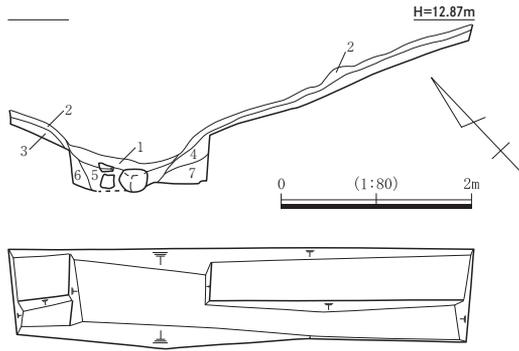
第8トレンチ(Tr8)〔第33図、図版6〕

第8トレンチは興禅寺の車庫から庭園に続く幅約2mの小道に直交する方向でトレンチ(1.5×0.5m)を設定した。第1層は10cmほどの表土で盛土と考えられる。以下、盛土と考えられる堆積層(第2・3層)が続き、深さ約50cmで地山が確認される。

出土遺物は肥前や在地の陶磁器と近世の瓦などで盛土は近世以降と考えられる。

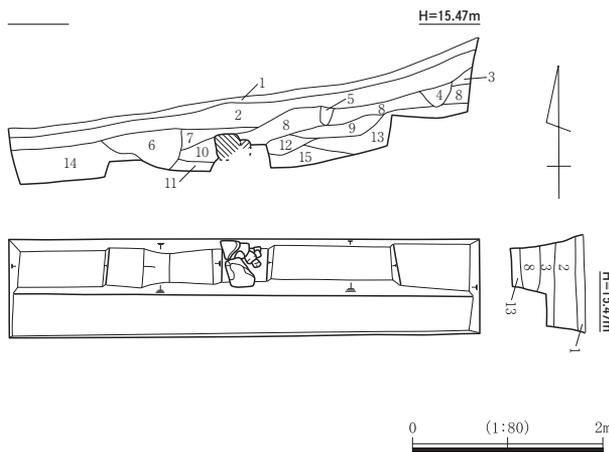
小結

今回の調査は、昭和12(1938)年に実施された測量図を元に、当時の主要庭園部を復元することが目的であった。令和4(2022)年度の調査では、第1トレンチで井戸跡を確認し、第2トレンチと第3トレンチで谷筋と思われる堆積層を確認した。第4トレンチで確認された石段状遺構と土坑状遺構については、当時の測量図に第4トレンチ周辺から東側に登る石段が画かれており、この石段に関わるものの可能性



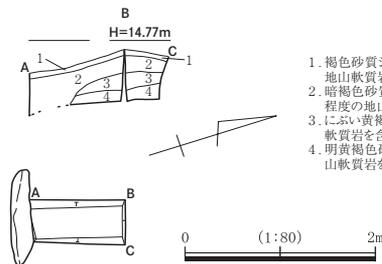
1. にぶい黄褐色シルト 10YR5/4(表土(谷底) 水分を含む 1mm程度の地山軟質岩を含む)
2. 黄褐色砂質シルト 10YR5/6(表土 1mm程度の地山軟質岩を含む)
3. 黄褐色砂質シルト 10YR5/6(第2層より暗い 1mm～1cm程度の地山軟質岩を含む)
4. 明黄褐色砂質シルト 10YR6/6(1mm～1cm程度の地山軟質岩を含む)
5. 灰黄褐色シルト 10YR4/2(1mm程度の地山軟質岩を含む)
6. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR5/4(1mm程度の地山軟質岩を含む)
7. 灰黄褐色砂質シルト 10YR6/2(1mm程度の地山軟質岩を含む)

第29図 栗谷所在遺跡 第3トレンチ実測図



1. 褐色砂質シルト 10YR4/4(表土 腐植土 1cm程度の地山軟質岩を含む ビニール片を含む しまりなし)
2. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR4/3(瓦片を含む 1cm程度の地山軟質岩を含む)
3. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR4/3(第2層より明るい 1cm程度の地山軟質岩を含む 炭化物をわずかに含む)
4. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR4/3(根痕 1mm程度の地山軟質岩を含む)
5. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR5/3(根痕 1mm程度の地山軟質岩を含む 炭化物をわずかに含む)
6. 黒褐色砂質シルト 10YR3/2(根痕 1mm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を含む)
7. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR5/4(1cm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を含む)
8. 暗褐色砂質シルト 10YR3/4(0.5mm～1cm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を含む)
9. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR4/3(やや暗い 炭化物を含む)
10. 暗褐色砂質シルト 10YR3/4(0.5mm～1cm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を多く含む)
11. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR4/3(SD埋土 土器片を含む 1cm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を多く含む)
12. 褐色砂質シルト 10YR4/4(3cm～5cm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を含む しまりやや有)
13. 褐色砂質シルト 10YR4/6(0.5mm～3cm程度の地山軟質岩を含む)
14. 褐色砂質シルト 10YR4/4(3cm～5cm程度の地山軟質岩を含む)
15. 褐色砂質シルト 10YR4/4(1mm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を含む)

第30図 栗谷所在遺跡 第4トレンチ実測図



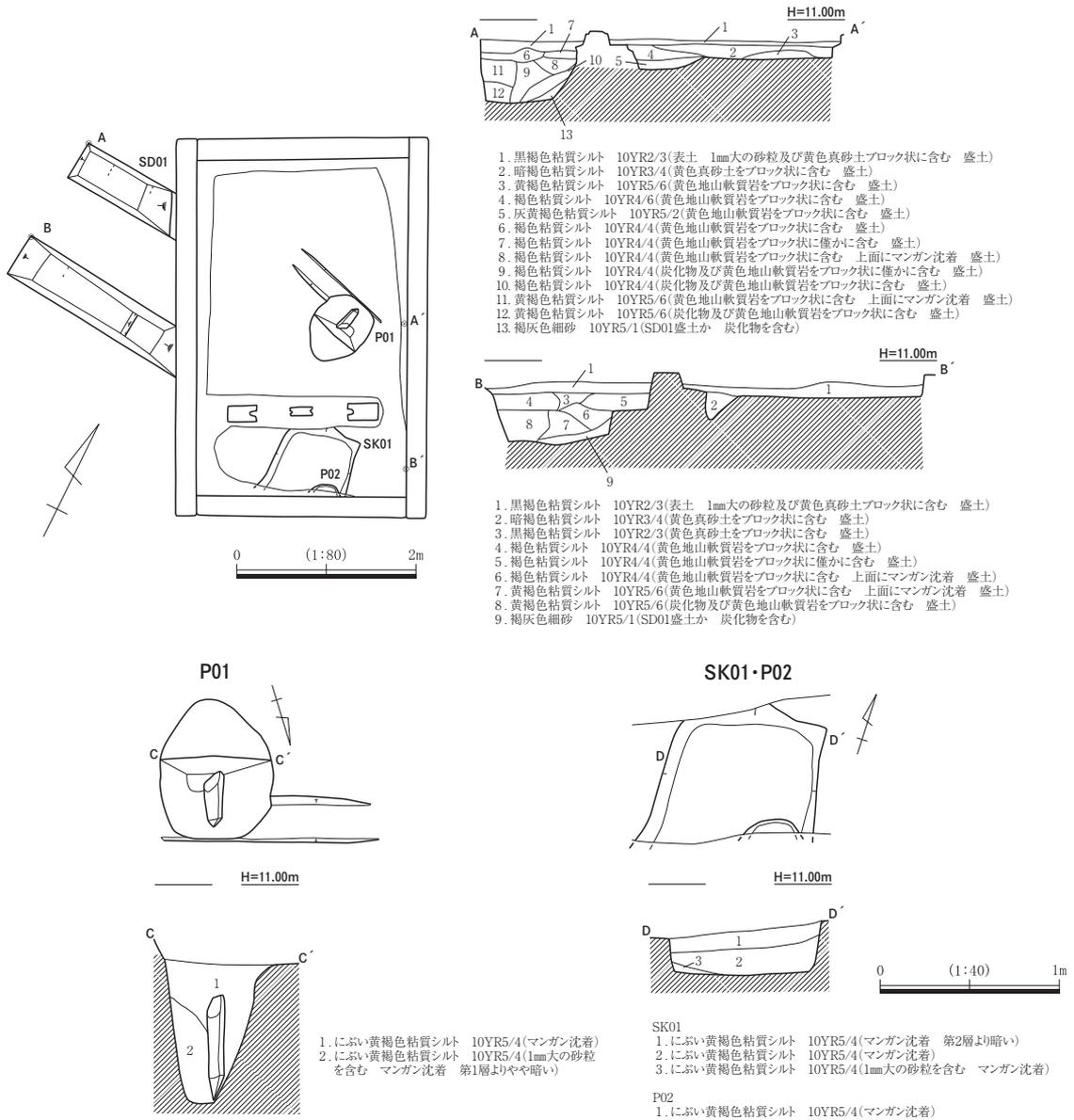
1. 褐色砂質シルト 10YR4/4(瓦片を含む 1mm程度の地山軟質岩を含む 炭化物をわずかに含む)
2. 暗褐色砂質シルト 10YR3/4(瓦片を多く含む 1mm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を含む)
3. にぶい黄褐色砂質シルト 10YR5/3(1mm程度の地山軟質岩を含む 炭化物を多く含む)
4. 明黄褐色砂質シルト 10YR6/6(3cm～5cm程度の地山軟質岩を含む)

第31図 栗谷所在遺跡 第5トレンチ実測図

が推定される。第5トレンチの周辺は40～50cm程度の盛土が行われていることが判明した。次に令和5(2023)年度の調査では、第6トレンチで溝の方向を確認し、第7トレンチで測量図にみられる溝と想定される砂層を確認された。以上、調査地の平地部に関しては表土を除けば造園時の客土が確認された。斜面に関しても同様の堆積状況と思われるが、谷筋と溝に関しては注意し、埋土の掘削が必要と思われる。

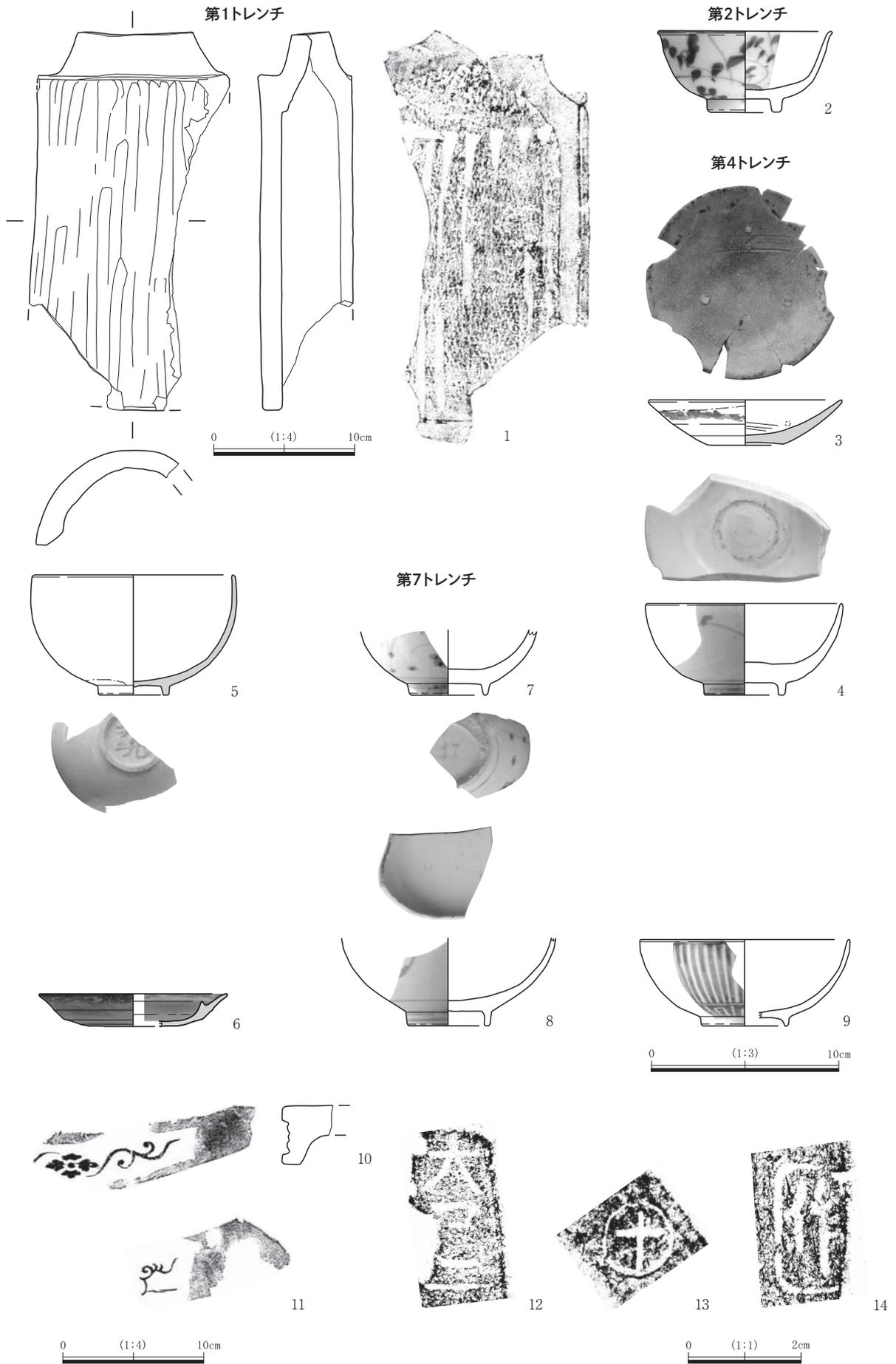
参考文献

有限会社平凡社地方資料センター 1992『鳥取県の地名』



第32図 栗谷所在遺跡 第7トレンチ実測図

第33図 栗谷所在遺跡 第8トレンチ実測図



第34図 栗谷所在遺跡 出土遺物実測図

第9節 山宮阿弥陀森遺跡

調査期間 令和5(2023)年1月17～18日

山宮阿弥陀森遺跡は、鳥取市気高町西方の逢坂谷のやや南部の丘陵上に所在している。今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、調査地は鳥取市立逢坂小学校から南に約300mの地点にトレンチ(3×3m)を設定した。

第1トレンチ(Tr1)〔第36図、図版6〕

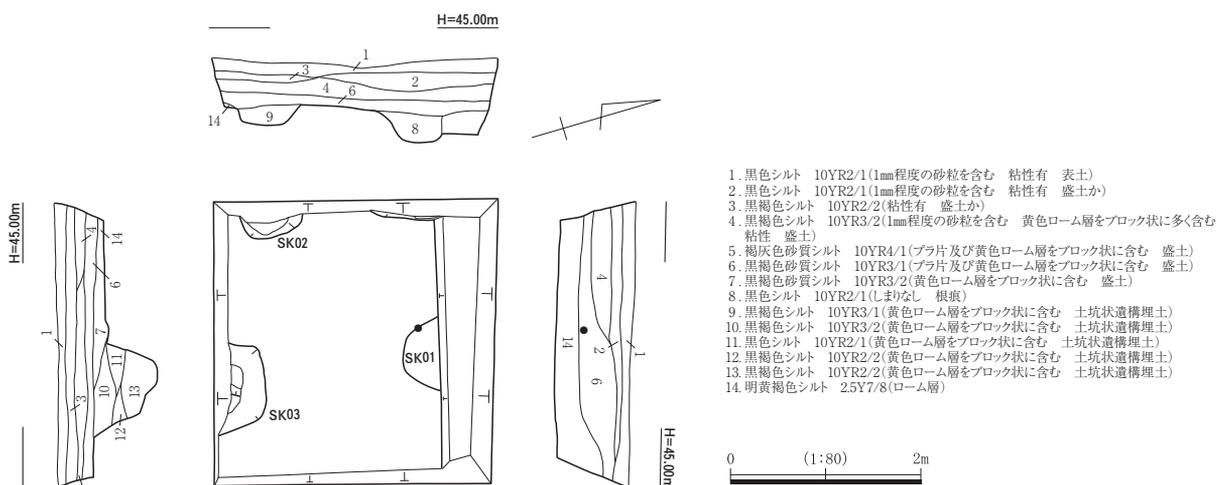
調査の結果、現況の地表面下に20cm程度の表土(第1層)が認められる。次に、第2層と第3層が続き、第4～7層は、盛土と考えられ、黄色ローム層がブロック状に含んでいる。また、土坑状遺構が3基検出された。以下、第14層はローム層となる。なお、出土遺物は表土から第7層にかけて近世または近代を推定される陶磁器類やプラスチック片などが出土している。また、土坑状遺構の埋土は、上層の盛土と堆積状況が比較的によく似ており、ほぼ同時期のものと想定される。

小結

今回の調査では、近代以降と考えられる遺構が確認されたが、山宮阿弥陀森遺跡は気多郡衙に推定される上原遺跡群に含まれている。調査地の周辺に古墳時代から古代を中心とした集落遺跡等の存在を否定できない。今後も周辺の開発等の際には十分に注意が必要であると考えられる。



第35図 山宮阿弥陀森遺跡 調査トレンチ位置図



第36図 山宮阿弥陀森遺跡 第1トレンチ実測図

第10節 大桒遺跡

調査期間 令和5(2023)年2月1～3日

大桒遺跡は鳥取市大桒および嶋に所在している。野坂川左岸の扇状地および河岸段丘上に展開し、縄文時代から近世にかけての複合遺跡として知られ、弥生時代後期には拠点的な集落遺跡であったと想定されている。今回の調査は擁壁設置に伴い実施され、大桒集落の後背部にトレンチを2本設定した。

第1 トレンチ(Tr1)〔第38図、図版6〕

調査の結果、現況の地表面下に30cm程度の表土(第1層)が認められる。次に、第2層(にぶい黄褐色砂質シルト)および第3層が1mm程度の砂粒を含み、第4層(褐色砂質シルト)と続く。なお、遺物は出土せず、遺構も検出されなかった。

第2 トレンチ(Tr2)〔第39・40図、図版7・10〕

調査の結果、現況の地表面下に20cm程度の表土(第1層)が認められる。次に第2層(褐灰色砂質シルト)が続き、第3層(褐色砂質シルト)では近世の陶磁器が出土している。陶磁器のほかにもプラスチック片や畳の切れ端なども含まれる。斜面上位には複数の御墓がみられ、第3層はこれらが築かれた際に盛られたものと考えられる。第4層は褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの混層で、近世の陶磁器や土器が出土している。第5層(暗褐色砂質シルト)の上位では、第4層とほぼ同時期の土器が出土している。以下、第6(暗褐色砂質シルト)・7層(にぶい黄褐色砂質シルト)と続く。第4層については第5層の上面に第3層が盛られた際に攪拌された層と想定される。第5層と第6層の下面で遺構検出を行ったが、確認は検出されなかった。

出土遺物のうち、第4層および第5層から出土した土器片を図化した。(1)は弥生時代後期から古墳時代前期初頭に比定される甕である。(2)は器台の受部と想定される。(3)は古墳時代前期に比定される高坏の坏部と想定される。(4)は弥生土器中期に比定される甕の底部である。ほとんどの出土遺物は風化剥落が著しく斜面上位から流入したものが多いものと思われる。

小結

今回の調査では、第1 トレンチは明確な遺構や遺物を確認することが出来なかったが、第2 トレンチでは弥生時代中期～古墳時代前期にかけての土器が出土した。前述したが、大桒遺跡は弥生時代後期を

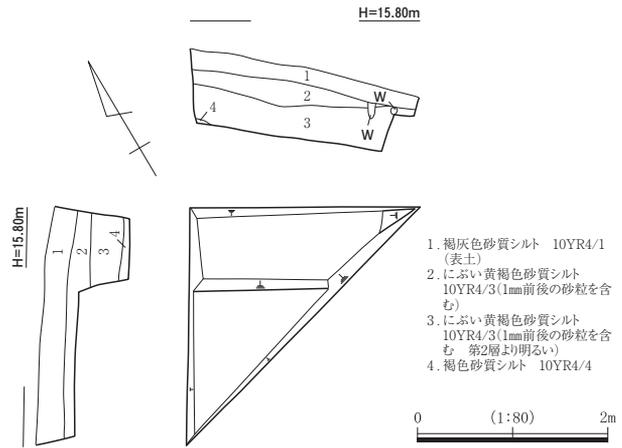


第37図 大桒遺跡 調査トレンチ位置図

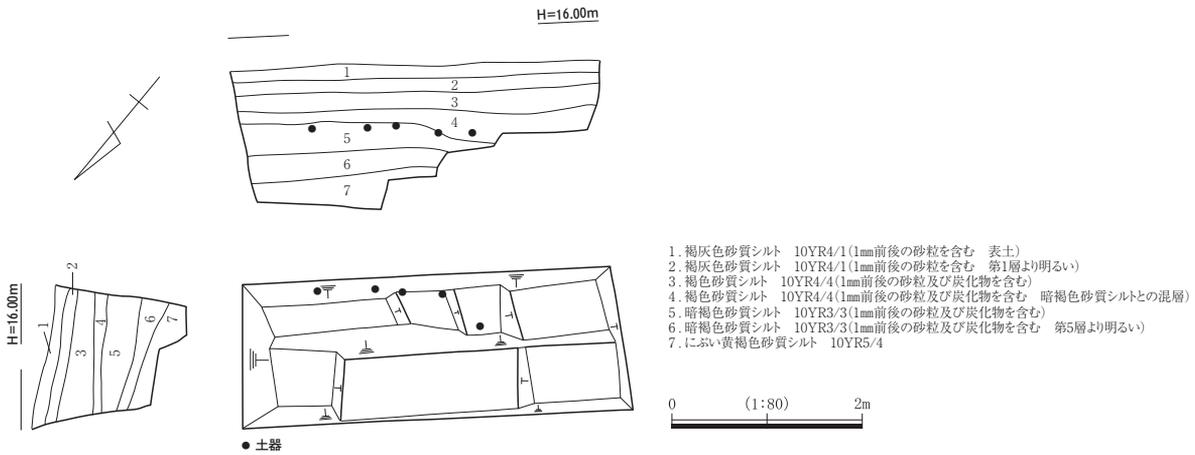
中心とした拠点集落と想定される縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。さらに、調査地の北西側には鳥取平野最大級の前方後円墳として知られる柗間1号墳(全長112m)が位置している。今後も周辺の開発等に伴ってはきめの細かい対応が必要であると考えられる。

参考文献

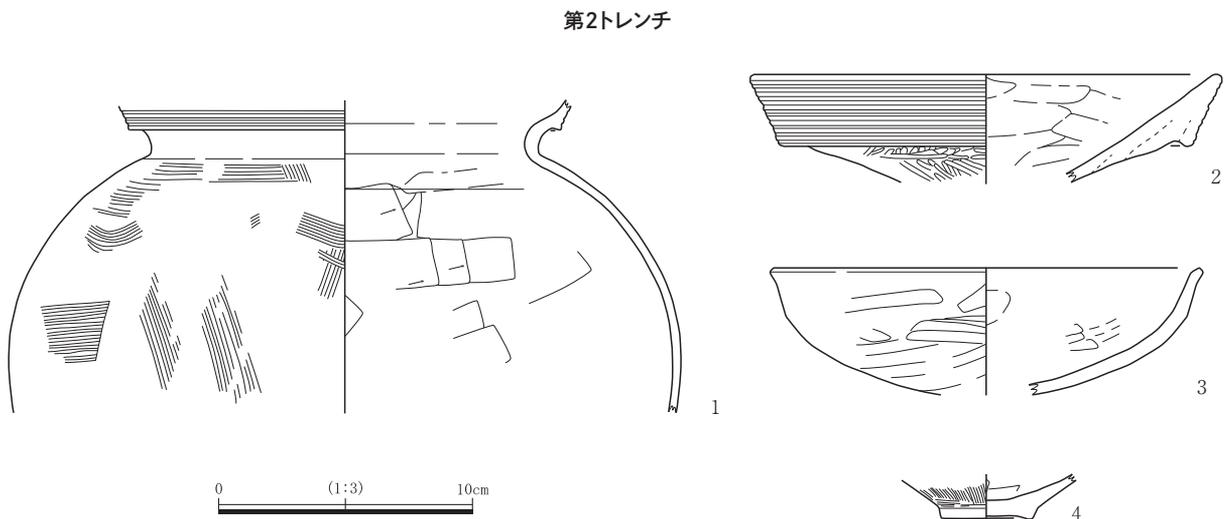
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2018
『大柗遺跡』鳥取県教育委員会



第38図 大柗遺跡 第1トレンチ実測図



第39図 大柗遺跡 第2トレンチ実測図



第40図 大柗遺跡 出土遺物実測図

第11節 湖山第1遺跡

調査期間 令和5(2023)年2月9～22日

湖山第1遺跡は鳥取市湖山町に所在している。湖山池の北東岸に位置し、湖山第2遺跡と併せて弥生時代から中世を中心とした集落遺跡として知られている。湖山池北東岸の標高10～30mのゆるやかな波状の起伏をもつ濃山台地に立地し、東側を湖山第1遺跡と南側を湖山第2遺跡とされている。

湖山池は、中世まで日本海とつながった内海であったと考えられており、内海を利用した他地域との交流が窺える遺構や遺物が多く確認されている。また、調査地の付近は鳥取市内でも有数の遺跡密集地である。

湖山第1遺跡は、「県道飛行場布勢線」道路改良工事ならびに農地造成に伴い、昭和63(1988)年に発掘調査が実施されている。調査の結果、古墳時代中期から後期の25棟の竪穴建物跡や平安時代と中世の掘立柱建物跡7棟等が検出された。多くの土師器や須恵器などの遺物が出土している。また、小型の竪穴建物跡から鉄滓が出土しており鍛冶工房跡の可能性が推定されている。

今回は保育園前の駐車場整備に伴う調査で、遺構面の確認のため南北に長いトレンチ(5×2m)を設定して、遺構・遺物の有無を確認した。

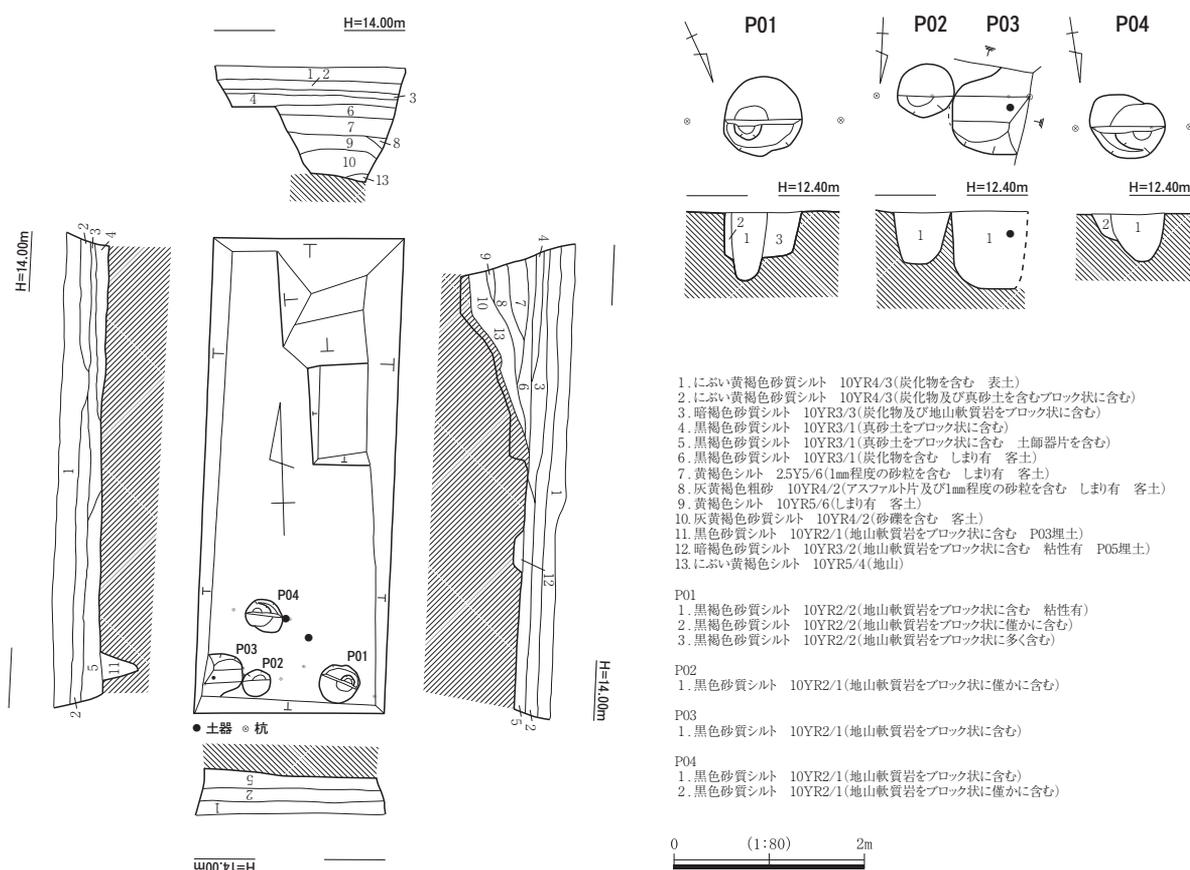
第1トレンチ(Tr1)〔第42図、図版7〕

調査の結果、現況の地表面下に30cm程度の表土(第1層)が認められる。次に、第2(にぶい黄褐色砂質シルト)～5層(黒褐色砂質シルト)が続く。トレンチの北側には、客土と考えられる第6(黒褐色砂質シルト)～10層(灰黄褐色砂質シルト)が堆積し、砂礫やタイル片、アスファルト片等が含まれる。遺構はトレンチ南側の第5層下面でピットを5基検出されている。なお、遺物は第1～5層で現代の陶磁器が出土し、第5層では赤彩土器や土師器も含んでいる。また、P01～04の埋土から土師器が出土している。

今回の調査ではトレンチの南側で遺構が検出される結果となった。昭和63(1988)年実施の調査地はトレンチの南側に位置している。今回確認された遺構は、前回の検出された集落遺跡に付属するものの可能性が考えられる。



第41図 湖山第1遺跡 調査トレンチ位置図



第42図 湖山第1遺跡 第1トレンチ実測図

小結

今回の調査では、ピットが5基検出され、遺物は赤彩土器や土師器、現在の陶磁器などが出土した。ピットは第5層下面で検出されており1面が想定される。時期については、第5層から出土した古墳時代の土師器からこの時期にあたるものと想定される。前述したが、昭和63(1988)年に実施された発掘調査では平安時代と中世の掘立柱建物跡が確認されている。今回の調査で確認することが出来なかった平安時代と中世の遺構面については、近代以降の削平を受けている可能性が想定される。ただし、今回の調査範囲は小規模であることから、詳細については今後に予定されていると思われる発掘調査に委ねたいと思う。

以上のことから、今回の第1トレンチ南側は遺構が遺存するものと想定されるため、駐車場の整備計画によっては発掘調査の必要性があるものと考えられる。

参考文献

鳥取県教育委員会 1989『湖山第1遺跡』
 錦織勤 2013『古代中世の因伯の交通』鳥取県
 有限会社平凡社地方資料センター 1992『鳥取県の地名』

第12節 身干山遺跡

調査期間 令和5(2023)年2月27日～3月1日

身干山遺跡は鳥取市白兎の身干山および奥内海の砂丘地帯に所在する遺物の散布地として知られている。今回の調査は、道路整備に伴う調査で、遺構・遺物の有無の確認のため、南北に長いトレンチ(5×2m)を設定した。

第1トレンチ(Tr1)〔第44図、図版7〕

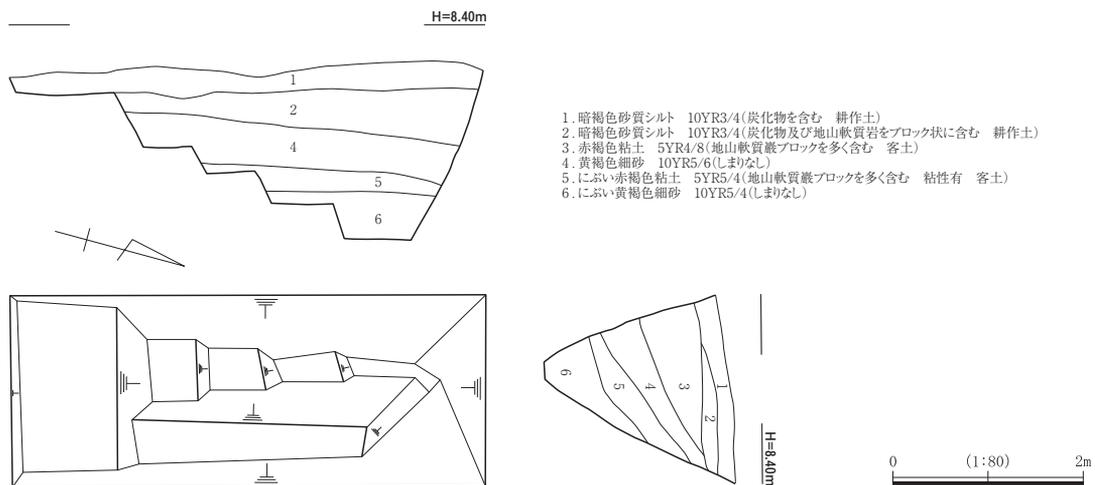
調査の結果、現況の地表面下に20～40cmは耕作土と考えられる表土(第1・2層)が認められる。以下、客土と考えられる第3層および第5層と第4、6層の互層が堆積している。なお、遺構は検出されず、遺物は現代の陶磁器のみである。

小結

今回の調査では、近代以降と考えられる客土と自然堆積層が確認されたが、昭和48(1973)年頃に採砂工事が行われた際には、備前焼の壺や播鉢、弥生土器、鉄製品(太刀・小刀)、宝篋印塔や五輪塔、古墳時代の石棺、数珠や筭などが多量に出土したことで知られている。周辺に遺物散布地点が散在する遺跡として認識し、今後も周辺の開発等には注意が要すると考えられる。



第43図 身干山遺跡 調査トレンチ位置図



第44図 身干山遺跡 第1トレンチ実測図

第13節 鳥取城下町遺跡(第16次調査)

調査期間 令和5(2023)年3月6～16日

鳥取城下町遺跡第16次調査区は、国道53号線沿いに位置する旧鳥取森林管理署南西側に位置している。城下町遺跡が位置している千代川の東岸から鳥取駅の北側、現在の鳥取市内中心地は遺跡の空白地帯と想定されている。城下町形成される以前は湿地帯であったと伝えられており、遺跡の分布は平野の沿岸部や山裾の微高地を中心に展開しているものと想定されている。

鳥取城下が形成された正確な時期は不明であるが、天正8(1580)年に羽柴秀吉軍の第1次鳥取城攻撃の際に、山裾の町家や市場などが焼き払われたとされており、少なくともこの頃には鳥取城下が形成されていたことが想定される。

近世の鳥取城下町が形成されたのは、天正9(1581)年から慶長5(1600)年までの宮部氏(五万石余)在城時期と慶長5年から元和3(1617)年までの池田長吉(六万石余)在城時期、元和3年から寛永9(1632)年までの池田光政(三二万石)領治時期にそれぞれ整備されたものと考えられる。まず、宮部氏はそれまでの自然地形を利用して築かれていた土造りの中世城郭から石造りの織豊系城郭へと発展させ、現在に残る鳥取城の土台を築いたと考えられる。次に、池田長吉は堀などの城郭部とともに城下も整備し、鳥取城の基礎を築いたとされるが、具体的な様子は不明である。最後は池田光政の時期になると、32万石の大名の居城を支えている大勢の家臣を迎えるにあたって、6万石の居城であった鳥取城は手狭とされ、城郭及び城下の大規模な整備が急がれたものと想定される。とくに、屋敷地の不足は深刻であり、城内に多数の家臣を住ませたとされている。また、鳥取城下は相次いで火災に見舞われており、万治3(1660)年の出来薬師火事、正徳元(1711)年の真教寺火事、翌2年の麩屋火事、享保5(1720)年の石黒火事、同9年の黒川火事、同12年の帳屋火事、同20年の長田火事、宝暦3(1753)年の帽子屋火事、同6年の川淵端丁火事、寛政10(1798)年の茶町火事、文化7(1810)年の矢津大火、同9年の佐橋火事、文政2(1819)年大路屋火事などが続いたとされる。とくに、石黒火事の被害は著しく、城下より起こった火事は城内に飛び火し、城を含む山全体と城下町すべてを灰燼に帰したとされる。一方、鳥取城下は古い



第45図 鳥取城下町遺跡(第16次調査) 調査トレンチ位置図

袋川筋を人工的に付替えた跡地に形成されたため、増水時には袋側の水が旧河道へと氾濫し、城内と城下とも洪水に見舞われたとされ、城下一帯が水害から免れるようになるのは、袋川の新流路が開かれる近代以降であるとされる。

鳥取城下町遺跡は、平成21(2009)年から駐車場整備や建物建設などの開発工事によって調査が実施されている。今回は旧鳥取森林管理署の開発計画に伴う調査で、工事計画地は鳥取藩の上級家老であった荒尾但馬の屋敷地があったとされ、遺構面の有無や高さなどを確認することを目的として南北に長いトレンチ(5×2m)を設定した。

なお、令和元(2019)年度にも工事計画地内の試掘調査が実施され、標高4.4～4.5m付近に1面と、整地層の可能性が測定される砂層が2面の計3面の遺構面が確認されている。また、確認された溝状遺構から多量の陶磁器や木製品が出土し、「修理様」と文字が書かれた荷札と思われる木製品や数点の墨書が確認された。

第1 トレンチ(Tr1)〔第46・47図、図版8・10〕

調査の結果、現況の地表面下に20cm程度の表土(第1層)が認められる。次に、第2(明黄褐色真砂土層)～4層(褐色砂礫層)が続き、鳥取森林管理署建築当時の客土と考えられる。第5層(暗褐色シルト層)の上面には炭化物がみられ、第6層(暗褐色シルト層)および第7層(黒褐色シルト層)は北西側に堆積し、第7層の上面および下面に鉄分が沈着する。第8層(暗褐色シルト層)を掘り込んでSK01を検出される。また第8層を掘り込み円礫による暗渠が築かれる。第9層(暗褐色シルト層)の東側の上面には炭化物がみられ、第10層(黒褐色シルト層)には多量の炭化物を含んでいる。以下、第11層(暗褐色シルト層)・12層(褐色シルト層)が続く。

遺物は第8～11層で陶磁器および瓦が出土し、第12層から土師器片が出土している。また、第10層から17世紀前半に比定される陶磁器の皿が出土した。出土遺物から第8層以下は近世層と考えられる。また、第5～7層も後世に削平されたと想定すれば近世層の可能性もある。標高約4.2mの第8層付近には礎石が点在する。第10層は焼土層と考えられ、17世紀後半に比定される陶磁器が出土している。第9層は焼土層を覆うための整地層の可能性もある。第11層と第12層はそれ以前の堆積層と考えられる。

出土した陶磁器のうち、第10層の焼土層下層から出土した小皿(1)・(2)や口縁部(3)と第8層から出土した底部(4)を図化した。

小結

以上、今回の調査では第1～4層は現代の客土と考えられるが、第5層以下は近世の遺構面が遺存する可能性が確認された。とくに第10層の焼土層と第9層の整地層、第8層付近の礎石跡は遺構面が遺存する可能性が高く注意が必要であると思われる。なお、道路に面した石垣は、第10層の焼土層よりも上位に裏栗石が積まれていることから、火事後に積まれたものと推定される。

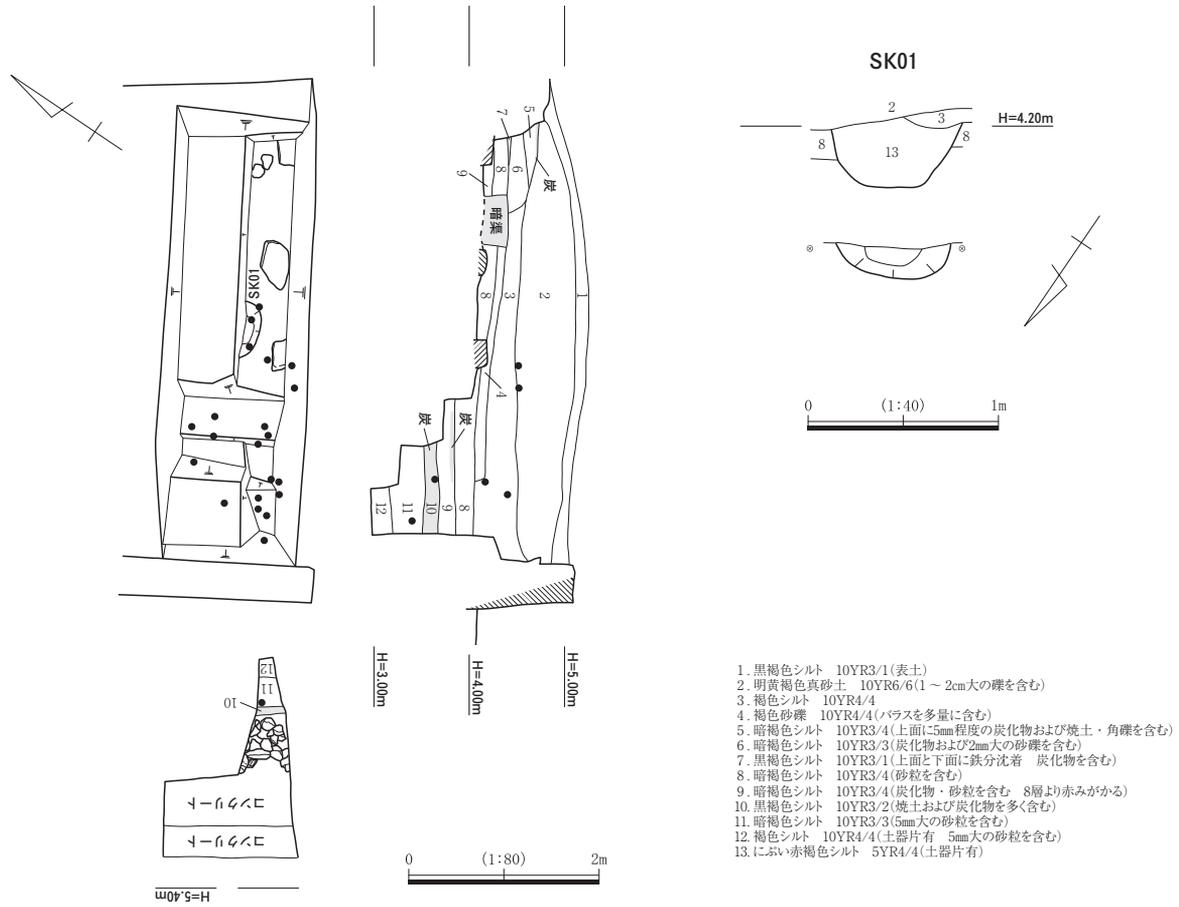
今回の試掘調査によって、旧森林管理署内の国道53号線沿いは、標高約4.7mの第5層以下は遺構面が遺存する可能性が想定されるため、今後の開発等に際しては十分に注意を要するものと考えられる。

参考文献

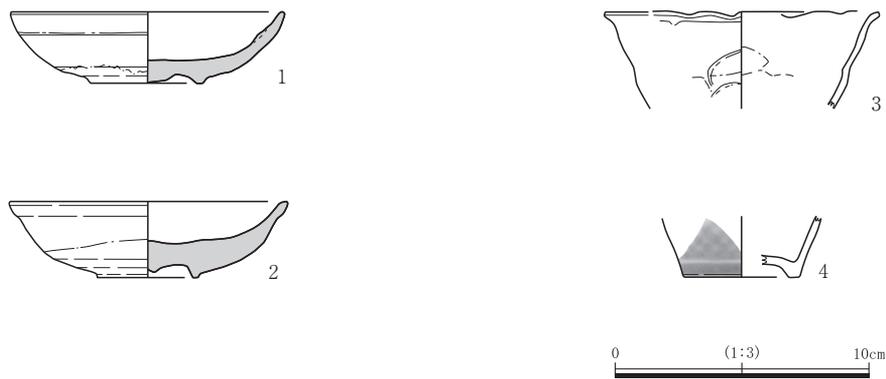
鳥取市教育委員会 2017 『平成28年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

鳥取市教育委員会 2021 『令和2年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

有限会社平凡社地方資料センター 1992 『鳥取県の地名』



第46図 鳥取城下町遺跡(第16次調査) 第1トレンチ実測図



第47図 鳥取城下町遺跡(第16次調査) 出土遺物実測図

第14節 鳥取城跡附太閤ヶ平(第60次調査)

調査期間 令和5(2023)年3月17~24日

仁風閣は鳥取藩主の池田仲博伯爵によって建てられた。明治40(1907)年、当時の皇太子嘉仁親王(のちの大正天皇)の山陰行啓時の宿泊施設として鳥取城跡の扇御殿跡に建てた別荘である。フレンチ型ルネッサンス様式を基調とした白亜の木造瓦葺2階建ての近代洋風建築で、国の重要文化財として指定されている。

今回の調査は、仁風閣周辺に排水用のU字溝を設置することを目的として実施した。仁風閣に沿って、細長いトレンチを8本設定した。

第1 トレンチ(Tr1) [写真1・2]

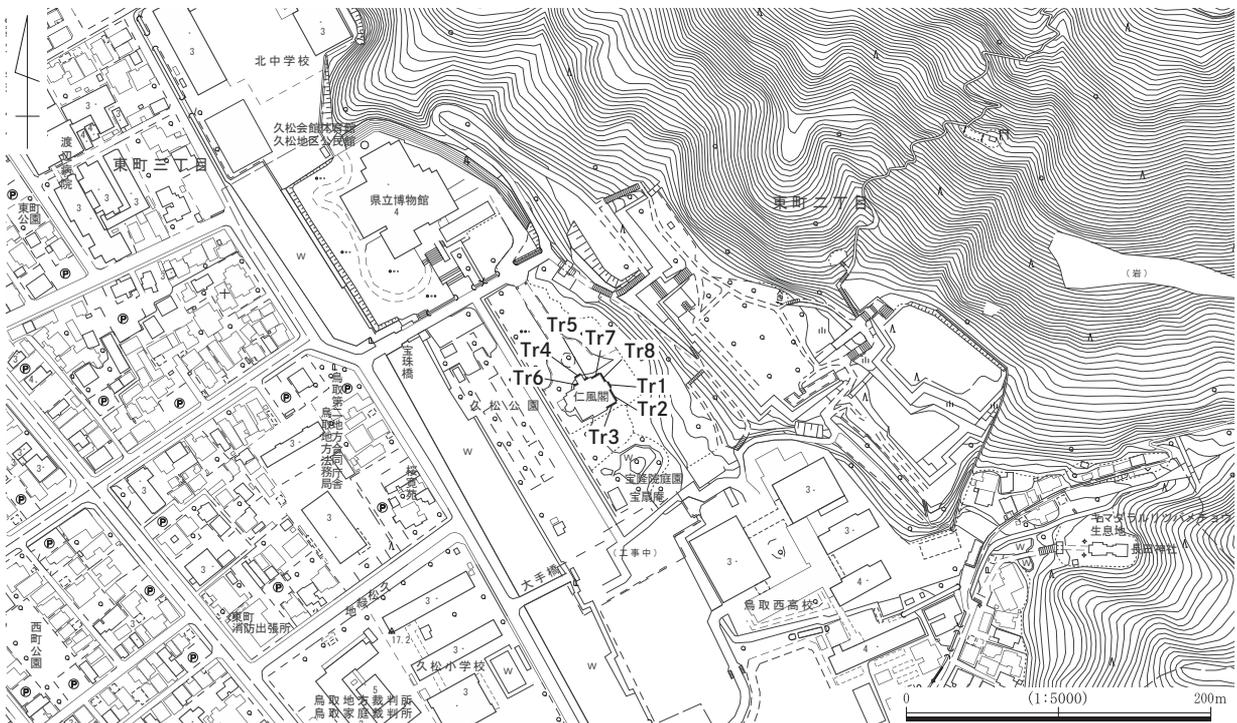
第1 トレンチは仁風閣の北側、東西方向に長いトレンチを設定した(4.5×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下より約5cmは碎石が敷設され、その下約10cmは真砂土が確認される。以下、65cm以上の客土がみられる。また、第1 トレンチの中央と南側には2本の土管が東西方向に埋められている。中央に埋められた土管の幅は約13cmで、深さ約30cmで確認され、南側の土管の幅は、約8cmで深さ約36~30cmで確認される。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約15cm下にあたる客土の上面と想定され、碎石からは陶磁器が出土している。

第2 トレンチ(Tr2) [写真3・4・5]

第2 トレンチは仁風閣の北側、第1 トレンチの東側に東西方向に長いトレンチを設定した(8.6×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下より約5cmは碎石が敷設され、その下約10cmは真砂土が確認される。以下、65cm以上の客土がみられる。トレンチ東側の客土下層の標高約7.365mで杭が確認された。また、第2 トレンチの中央で1本の土管が南東から北西方向に埋められている。土管の幅は、約13cmで深さ約23~20cmで確認される。この他にも、約15cmの深さから消火栓を注意喚起する貼紙が確認された。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約15cm下にあたる客土の上面と想定され、客土からは陶



第48図 鳥取城跡(第60次調査) 調査トレンチ位置図

磁器や瓦が出土している。

第3トレンチ(Tr3)〔写真6・7〕

第3トレンチは仁風閣の北側、南北方向に長いトレンチを設定した(7.3×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下より約5cmは碎石が敷設され、その下の約10cmは真砂土が確認された。以下、客土が続く。

仁風閣が建設された当時の面は客土の上面と想定され、標高は7.94m付近である。

第4トレンチ(Tr4)〔写真8・9〕

第4トレンチは仁風閣出入口の正面に南北方向に長いトレンチを設定した(4.5×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下より約10cmは碎石が敷設され、その下の約10cmは真砂土が確認された。以下、客土がみられる。第4トレンチの東側には、幅5cm程度の鉄管が深さ約南北方向に埋められている。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約20cm下にあたる客土の上面と想定され、碎石からは土師器や陶磁器等が出土している。

第5トレンチ(Tr5)〔写真10・11〕

第5トレンチは仁風閣出入口の北側に南北方向に長いトレンチを設定した(2.8×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下より約5cmは碎石が敷設され、その下面でモルタルがみられた。以下客土が続く。第5トレンチの中央に幅13cm程度の土管が約27cmの深さに埋められている。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約5cm下にあたる客土の上面と想定される。

第6トレンチ(Tr6)〔写真12・13〕

第6トレンチは仁風閣出入口の南側に南北方向に長いトレンチを設定した(3×1m)。調査の結果、現況の地表面下より約5cmは碎石が敷設され、その下面でモルタルがみられた。以下客土が続く。第5トレンチの中央に幅13cm程度の土管が約22cmの深さに埋められている。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約5cm下にあたる客土の上面と想定される。

第7トレンチ(Tr7)〔写真14・15〕

第7トレンチは仁風閣西側、第5トレンチの北側に南北方向に長いトレンチを設定した(6.1×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下より約5cmは碎石が敷設され、その下約10cmは真砂土が確認された。以下、客土が続く。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約15cm下にあたる客土の上面と想定される。

第8トレンチ(Tr8)〔写真16〕

第8トレンチは仁風閣北側に南北方向に長いトレンチを設定した(6.3×1.0m)。調査の結果、現況の地表面下、約5cmは碎石が敷設され、その下層にモルタルがみられた。以下客土がみられる。第5トレンチの中央には幅13cm程度の土管が約22cmの深さに埋められている。

仁風閣が建設された当時の面は、地表面直下約5cm下にあたる客土の上面と想定される。

小結

以上、今回実施した発掘調査は開発事業が目的ではなく、仁風閣の文化財保存修理工事に先行する事前調査であった。現地表面から近世遺構面までの深さ及び残存状況の確認を主たる目的とした。

調査の結果、仁風閣周辺は客土の後にモルタルまたは10cm程度の真砂土を敷かれ、5cm程度の採石が敷設されたことが判明した。また、客土の上面には排水用の土管や消火栓、鉄管等が確認された。客土からは陶磁器や土師器、近現代の瓦などが出土した。

今回の目的となる近世の遺構面については、やや斜面上位となる第7トレンチと第8トレンチでは地表面下5cm程度で確認されるが、基本的には15～20cm下で確認されるものと考えられる。今回の結果は文化財保存修理工事に向けて周知事項となった。



写真1 第1トレンチ深堀(南から)



写真2 第1トレンチ調査後(東から)



写真3 第2トレンチ杭検出近景(北から)



写真4 第2トレンチ調査後(西から)



写真5 第2トレンチ調査後(東から)



写真6 第3トレンチ断面深堀(東から)



写真7 第3トレンチ調査後(北から)



写真8 第4トレンチ調査後(南から)



写真9 第4トレンチ調査後(北から)



写真10 第5トレンチ調査後(南から)



写真11 第5トレンチ調査後(北から)



写真12 第6トレンチ調査後(南から)



写真13 第6トレンチ調査後(北から)



写真14 第7トレンチ深堀(北から)



写真15 第7トレンチ調査後(北から)



写真16 第8トレンチ調査後(西から)

写真図版

図版1



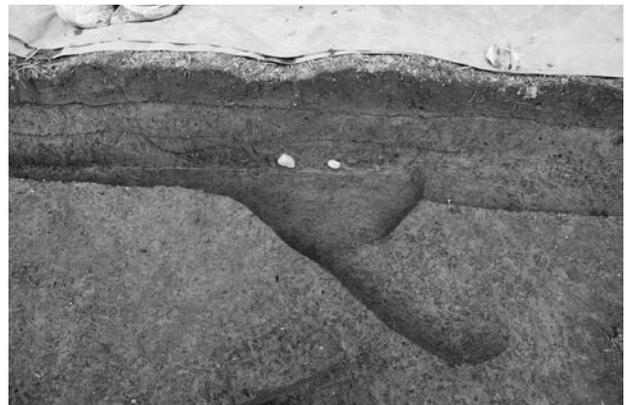
鳥取城下町遺跡(第15次) 第3トレンチ完掘(西から)



鳥取城跡(第54次) 埋設管検出状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチSK01検出(南から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチSD01・SK02完掘(南から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ調査地断面(南西から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第8トレンチ調査後(東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第9トレンチ完掘(南東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第9トレンチ北壁断面(南から)

図版2



宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ調査後(南から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチ調査地断面(南西から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチSE01検出(西から)



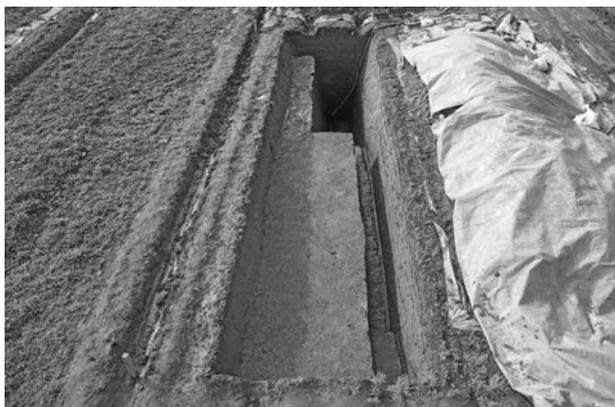
宮長竹ヶ鼻遺跡 第10トレンチSK01検出(西から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第11トレンチ調査後(東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第11トレンチ調査地断面(東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第12トレンチ調査後(東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第12トレンチ断面(南から)

図版3



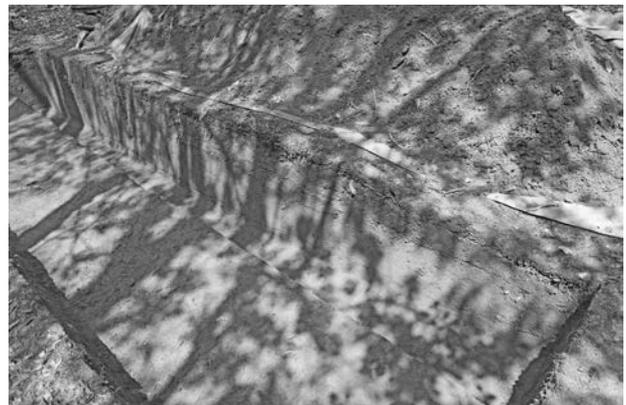
上野山5号墳 第1トレンチ調査後(南から)



上野山5号墳 第1トレンチ調査地断面(南東から)



上野山5号墳 第2トレンチ調査後(南から)



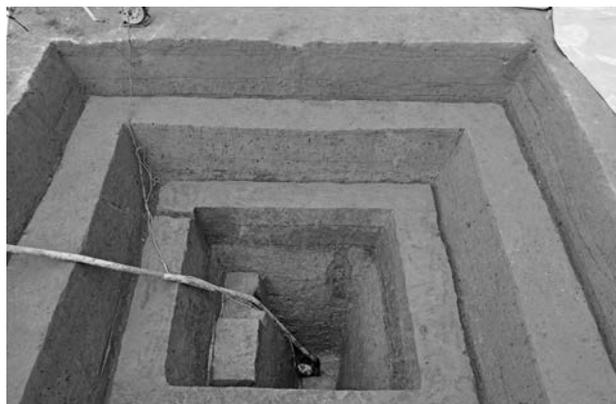
上野山5号墳 第2トレンチ調査地断面(南西から)



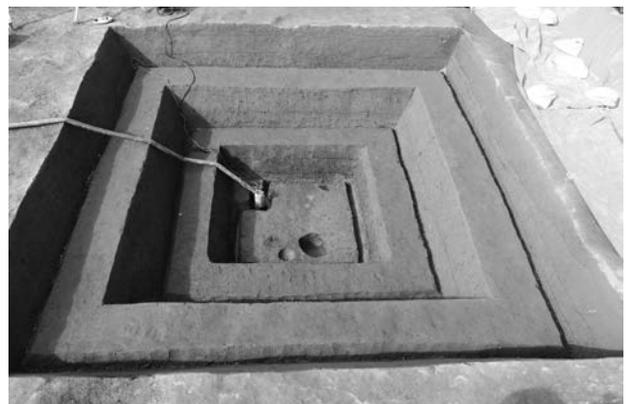
秋里遺跡 第1トレンチ調査前(北西から)



秋里遺跡 第1トレンチ最終深掘(南西から)



秋里遺跡 第1トレンチ最終深掘北壁面(南西から)



秋里遺跡 第1トレンチ第14層上面ピット完掘(南西から)

図版4



布勢鶴指奥遺跡 第1トレンチ調査前(西から)



布勢鶴指奥遺跡 第1トレンチ調査後(西から)



良田平田遺跡 第1トレンチ断面(東から)



良田平田遺跡 第1トレンチ調査後(南から)



栗谷所在遺跡 第1トレンチベルト設定状況(南から)



栗谷所在遺跡 第1トレンチ調査後(南から)



栗谷所在遺跡 第2トレンチ断面(南から)



栗谷所在遺跡 第2トレンチ調査後(南東から)



栗谷所在遺跡 第3トレンチ断面(南から)



栗谷所在遺跡 第3トレンチ調査後(東から)



栗谷所在遺跡 第4トレンチ断面(東から)



栗谷所在遺跡 第4トレンチ調査後(北東から)



栗谷所在遺跡 第5トレンチ調査後(北から)



栗谷所在遺跡 第5トレンチ断面(東から)



栗谷所在遺跡 第6トレンチ調査後(西から)



栗谷所在遺跡 第6トレンチ調査後(東から)

図版6



栗谷所在遺跡 第7トレンチ設定状況(西から)



栗谷所在遺跡 第7トレンチ調査後(南から)



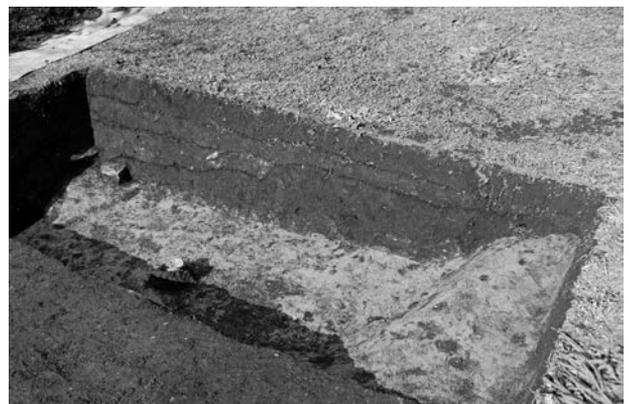
栗谷所在遺跡 第8トレンチ断面(南から)



栗谷所在遺跡 第8トレンチ調査後(南から)



山宮阿弥陀森遺跡 第1トレンチ調査後(北から)



山宮阿弥陀森遺跡 第1トレンチ北断面(南東から)



大桒遺跡 第1トレンチ断面(南西から)



大桒遺跡 第1トレンチ調査後(南東から)



大柵遺跡 第2トレンチ断面(西から)



大柵遺跡 第2トレンチ調査後(南西から)



湖山第1遺跡 第1トレンチP01平面(北から)



湖山第1遺跡 第1トレンチ西断面(北西から)



湖山第1遺跡 第1トレンチ調査後(南から)



湖山第1遺跡 第1トレンチ南断面(北から)



身干山遺跡 第1トレンチ断面(南東から)



身干山遺跡 第1トレンチ調査後(南から)

図版8



鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチ調査後(北東から)



鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチ断面(北から)



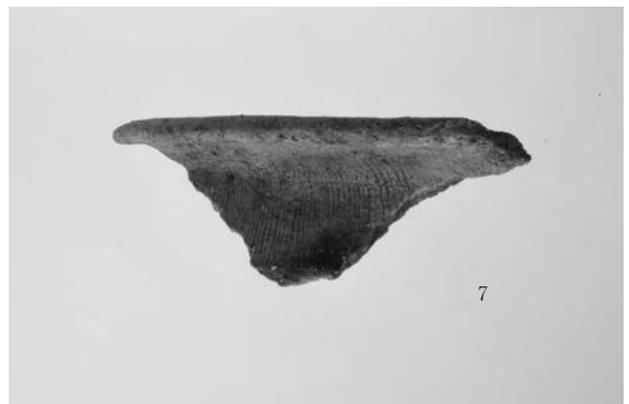
鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチ断面(北東から)



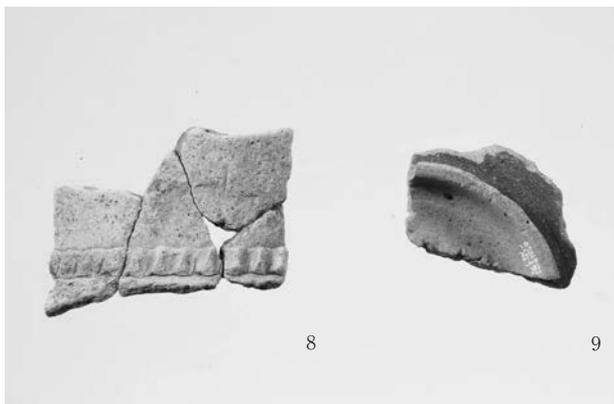
鳥取城下町遺跡(第16次) 第1トレンチSK01検出(南東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡(第8トレンチ) 出土遺物1



宮長竹ヶ鼻遺跡(第8トレンチ) 出土遺物2



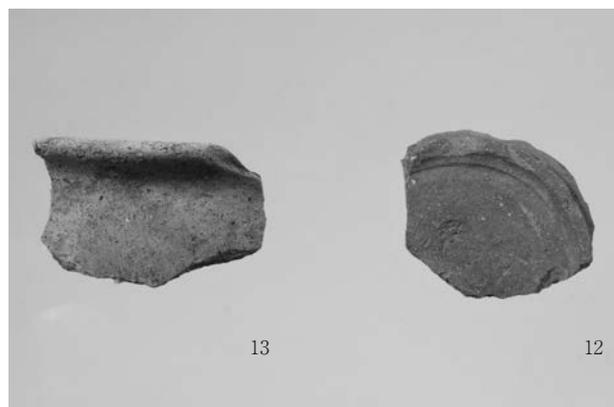
宮長竹ヶ鼻遺跡(第9トレンチ) 出土遺物1



宮長竹ヶ鼻遺跡(第9トレンチ) 出土遺物2



宮長竹ヶ鼻遺跡(第9トレンチ) 出土遺物 3



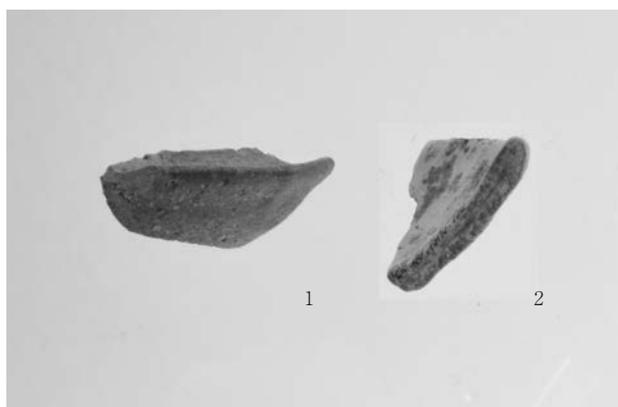
宮長竹ヶ鼻遺跡(第10トレンチ) 出土遺物



宮長竹ヶ鼻遺跡(第11トレンチ) 出土遺物



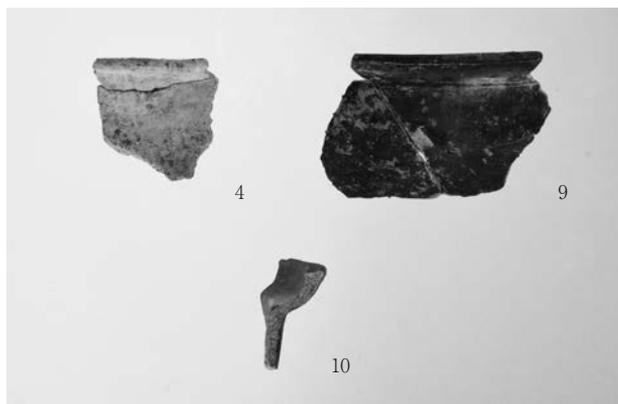
宮長竹ヶ鼻遺跡(第12トレンチ) 出土遺物



秋里遺跡 出土遺物 1



秋里遺跡 出土遺物 2

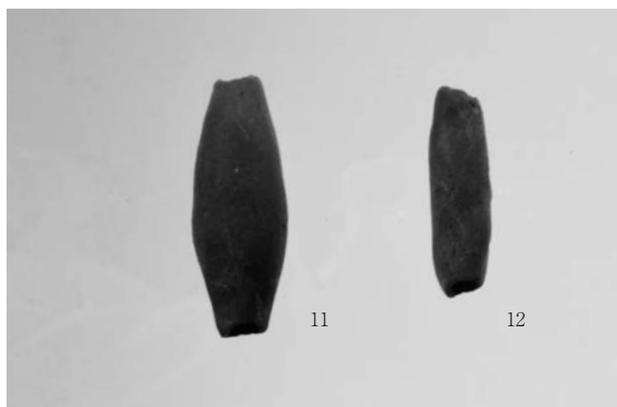


秋里遺跡 出土遺物 3



秋里遺跡 出土遺物 4

図版10



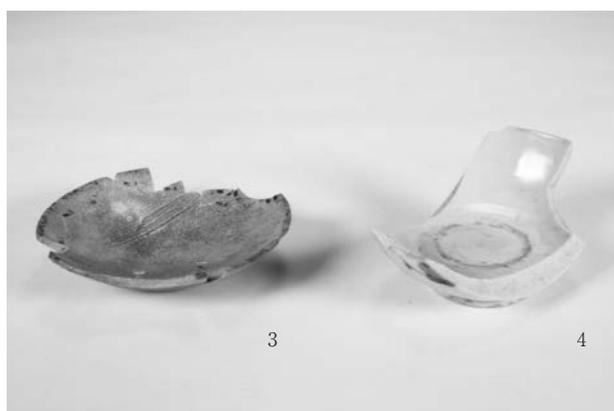
秋里遺跡 出土遺物 5



栗谷所在遺跡(第1トレンチ) 出土遺物



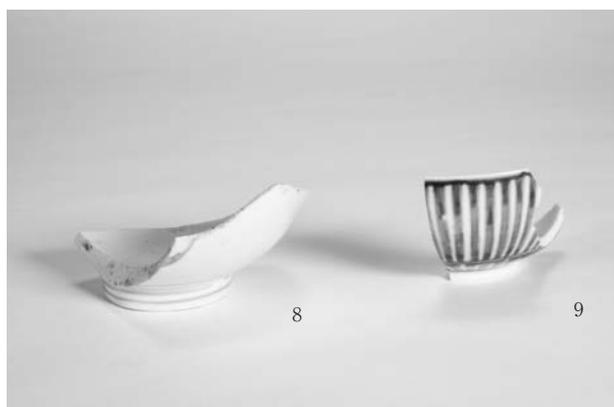
栗谷所在遺跡(第2トレンチ) 出土遺物



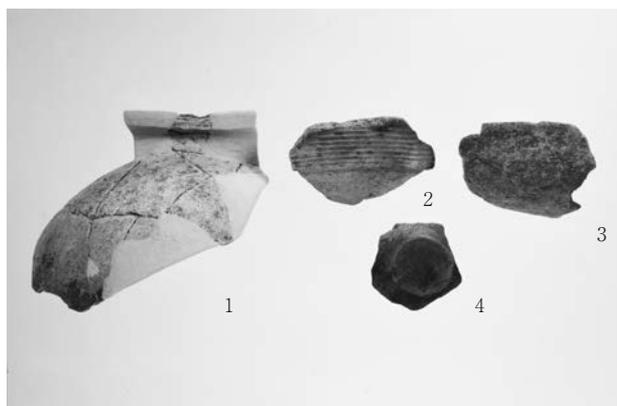
栗谷所在遺跡(第4トレンチ) 出土遺物



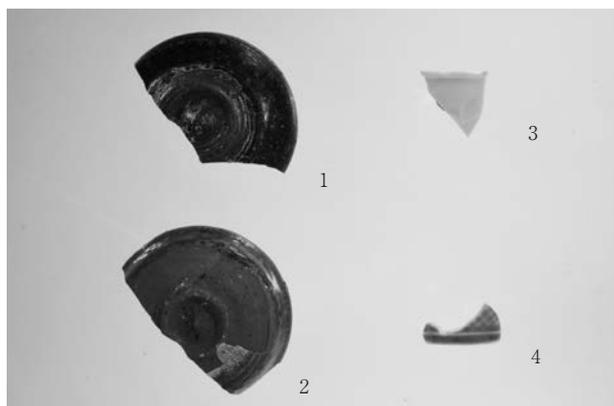
栗谷所在遺跡(第7トレンチ) 出土遺物 1



栗谷所在遺跡(第7トレンチ) 出土遺物 2



大楠遺跡(第2トレンチ) 出土遺物



鳥取城下町遺跡(第16次) 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	れいわ5ねんど とっとりしないいせきはくつちようさがいようほうこくしよ							
書名	令和5(2023)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名								
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市幸町71番地							
発行年月日	令和6年(2024)3月31日							
ふり が な 所 取 遺 跡 名	ふり が な 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面積 (㎡)	調 査 原 因
		市町村	遺 跡					
とっとりじょうかまちいせき 鳥取城下町遺跡 (第15次調査)	とっとりしひがしまち 鳥取市東町	31201	2-0373	35° 30' 41"	134° 14' 6"	令和2(2020)年 10月27・28日	3	建物建設
とっとりじょうあつげたりたいこうがなる 鳥取城跡附太閤ヶ平 (第54次調査)	とっとりしひがしまち 鳥取市東町	31201	2-0211	35° 30' 27"	134° 14' 20"	令和3(2021)年 5月25日～6月16日	20.6	埋設管確認
みやながたけがはいせき 宮長竹ヶ鼻遺跡	とっとりしかのう 鳥取市叶	31201	4-0070	35° 28' 29"	134° 13' 18"	令和4(2022)年 2月14日～4月5日	112	宅地造成
うえのやまごころふん 上野山5号墳	とっとりしひくべちようくじら 鳥取市福部町久志羅	31201	9-0022	35° 30' 8"	134° 17' 49"	令和4(2022)年 4月19～21日	14	太陽光発電施設 建設
あきさといせき 秋里遺跡	とっとりしあきさと 鳥取市秋里	31201	2-0008	35° 31' 18"	134° 13' 3"	令和4(2022)年 8月1～23日	26	開発計画
ふせつるさしあくふんぼぐん 布勢鶴指奥墳墓群	とっとりしふせ 鳥取市布勢	31201	1-0242	35° 29' 50"	134° 10' 40"	令和4(2022)年 9月9日	20.25	無線基地局建設
よしだひらたにいせき 良田平田遺跡	とっとりしよしだ 鳥取市良田	31201	1-0419	35° 29' 39"	134° 9' 11"	令和4(2022)年 9月7～12日	20.25	無線基地局建設
くりたにしょうがいせき 栗谷所在遺跡	とっとりしくりたにちよう 鳥取市栗谷町	31201	—	35° 30' 16"	134° 14' 30"	令和4(2022)年 9月25日～10月20日 令和5(2023)年 6月5～19日	53.39	庭園整備
やまみやあみだもりいせき 山宮阿弥陀森遺跡	とっとりしけなちようやまみや 鳥取市気高町山宮	31201	15-0495	35° 28' 40"	134° 2' 19"	令和5(2023)年 1月17・18日	9	住宅建設
だいかくいせき 大柄遺跡	とっとりしだいかく 鳥取市大柄	31201	1-0261	35° 29' 33"	134° 10' 52"	令和5(2023)年 2月1～3日	8.85	擁壁設置
こやまだいらいせき 湖山第1遺跡	とっとりしこやまちょう 鳥取市湖山町	31201	1-0346	35° 30' 53"	134° 10' 37"	令和5(2023)年 2月9～22日	10	開発計画
みほしやまいせき 身山遺跡	とっとりしはくと 鳥取市白兔	31201	1-0007	35° 31' 23"	134° 7' 0"	令和5(2023)年 2月27日～3月1日	10	道路建設
とっとりじょうかまちいせき 鳥取城下町遺跡 (第16次調査)	とっとりしひがしまち 鳥取市東町	31201	2-0373	35° 30' 23"	134° 14' 2"	令和5(2023)年 3月6～16日	10	開発計画
とっとりじょうあつげたりたいこうがなる 鳥取城跡附太閤ヶ平 (第60次調査)	とっとりしひがしまち 鳥取市東町	31201	2-0211	35° 30' 25"	134° 14' 15"	令和5(2023)年 3月17～24日	43.5	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥取城下町遺跡 (第15次調査)	城下町	近世	なし	なし	試掘調査として実施
鳥取城跡附太閤ヶ平 (第54次調査)	城跡	近世	礎石・敷石	なし	試掘調査として実施
宮長竹ヶ鼻遺跡	集落	古墳時代後期～古代	井戸跡・溝状遺構・土坑・ピット	陶磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・弥生土器	試掘調査として実施
上野山5号墳	古墳	なし	なし	なし	試掘調査として実施
秋里遺跡	集落	中世～近代	土坑・ピット	陶磁器・瓦質土器・土師器・土錘・煙管	試掘調査として実施
布勢鶴指奥墳墓群		なし	なし	なし	試掘調査として実施
良田平田遺跡		なし	なし	なし	試掘調査として実施
栗谷所在遺跡	寺院	近代以降	井戸跡、石段、溝状遺構、盛土	陶磁器・土師器・瓦	試掘調査として実施
山宮阿弥陀森遺跡		近代以降	土坑状遺構	陶磁器	試掘調査として実施
大柄遺跡		弥生時代～古墳時代	なし	陶磁器・土師器・弥生土器	試掘調査として実施
湖山第1遺跡	集落	古墳時代	土坑・ピット	陶磁器・土師器	試掘調査として実施
身干山遺跡		なし	なし	陶磁器	試掘調査として実施
鳥取城下町遺跡 (第16次調査)	集落	近代以降	土坑・焼土面・整地面	陶磁器・土師器・瓦	試掘調査として実施
鳥取城跡附太閤ヶ平 (第60次調査)		近代以降	整地面	陶磁器	試掘調査として実施

令和5(2023)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

令和6年(2024)3月31日

編集
発行 鳥取市教育委員会
〒680-8571 鳥取県鳥取市幸町71番地
TEL(0857)30-8421

印刷 日ノ丸印刷株式会社
〒680-0813 鳥取県鳥取市寿町915
TEL(0857)22-2248
